岳

No.45

題字·山下太郎名誉教授

静岡大学文理·人文学部同窓会
発行人　■鈴木基之
編集人　■岳委員会

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836　静岡大学共通教育A棟
Tel.054-238-5148　Fax.054-238-5148
Web Site:http://www.gaku.org

〈事務局への連絡〉

月曜日から金曜日の 10:00 ～ 16:00 にご連絡下さい。
(休日、時間外はメール及び FAX にてご連絡下されば、後で対応いたします)　担当 : 土屋

上原先生歓送会 (2月18日 ブケ東海)

本年３月をもって、上原先生は、思い出多き静岡の地を離れ、故郷東京に転居されることになりました。先生は、1961 年に静岡大学文理学部に着任され、92 年同大学長を退任されるまで、31 年の長きにわたって、多くの優れた学生を育て、世に送り出されました。

また、奥様は、内科、小児科医として多年にわたり、地域医療に貢献されてこられました。

静岡にいる卒業生からすれば、先生にいつまでも静岡にとどまっていただきたいのは山々ではありますが、やむを得ぬ事情もおありのことであり、ここに、上原ゼミの卒業生を中心に静大の関係者、農政研究会 (農業、食糧問題に関心を持っておられる静岡の地域の人たちの集まり) の有志が集い、歓送の宴が設けられました。

佐藤博明前学長挨拶

上原先生は、私が昭和 36 年に、文理学部に赴任したときに、浅田先生、豊川先生や小此木先生らとともに学部の運営に努めておられた。私は、大学人としてのモラル、振舞い方を上原先生の背中を見ながら育ってきた。学生部長のとき、2 年間、上原学長におつかえした。上原学長は、卒業式の告辞、入学式の祝辞に当たっては、事前の準備に力を注がれ、格調高い挨拶をされた。奥様には、我が家の主治医として、子供や、孫もお世話になった。東京に移られても、健康に留意されてお元気でお過ごし下さい。

上原先生挨拶

先年患った腰部脊柱管狭窄症の術後経過が必ずしも良好でなく、身体不調 (めまい·しびれ) が続いているので、今回、東京に戻って、専門的治療を受けるべく、44 年の長い間、お世話になった思い出多い静岡の地を離れることになった。

1961 年から 31 年間の静大生活では、大学内外の多くの方々から、ご支援·ご協力をいただいたことを、改めて感謝申します。しかし、その 31 年の半ば近くは、学長職を含み、学部長、評議員の役職にあり、学部改組問題等に忙殺されて、肝心の教育研究に専念する時間的余裕も少なく、専門の農業政策を軸とする地域社会経済の勉学が深められなかったことは、残念の極みである。

一時的にせよ、皆さんとお別れするに当って、新世紀最初の 10 年の半ばを過ぎた今日のわが国の問題について、若干のコメントを述べたい。

経済評論家 内橋克人氏によれば、戦後 60 年を経た現在、日本は、世界一の長寿国でありながら、10 人に 4 人は長生きを望まないというアンケート調査を紹介しつつ、「満たされざる長寿国」と捉え、生活保護世帯が高齢者を中心に急増する一方、世界の億万長者の 6 人に 1 人を日本人が占めるほどの富裕者層が現出するなど、社会の格差化を指摘し、さらに、以上の事実は、もはや、単なる貧富の側面の問題でなしに、貧困者にとっては、「生存リスクの格差」の重圧下に置かれていることを示すものであり、その点に照らせば、いまや、「人間は搾取の対象」ではなくなって、「排除の対象」になったとしている。

こうしてみれば、戦後 60 年の戦後とは何か、アジア太平洋戦争を分岐点とする「戦後」時期を捉え直す必要がないか、「戦後」も朝鮮・ベトナム・湾岸・イラク戦争等、人間の存在価値を否定するような戦争行為が戦前にもまして続発している現状を、どう理解すべきか、また、わが国が、敗戦の犠牲の下で勝ち取った平和憲法を否定し、軍隊あるいは戦力保持を実現すべきという戦争肯定の世論作りを政権党が促していることを無視してはならない。

故に、われわれは、戦前・戦後を捉え直すという新たな歴史認識に基づき、文字通り戦争のない世界を実現するために、平和憲法を積極的に活かす方向で、労組、生協、消費者団体の市民団体を中心に、団結・連帯して各地域で活動を広めていくことが、当面の課題となろう。

新住所 〒 170-0003
東京都豊島区駒込４丁目３番 20 号
プラウド駒込 838 号　TEL 03-3918-0341

法科大学院の精神を象徴するメッセージが掲げられる

今年２年目を迎えた法科大学院の玄関に写真のようなブロンズ銘板とともに、言葉の説明版と謝辞が掲げられましたので、ここにご紹介いたします。

この章句は、もとはギリシアの悲劇詩人エウリピデスの作品断片に由来し、ローマきっての哲学者キケロ (BC106-43) も二度にわたり引用しているが (アッティクス宛書簡Ⅵ 1、Ⅷ 8)、ストア派哲人にしてローマ皇帝であったマルクス・アウレリウス (AD121-180) がこれをやや変形した上掲ギリシア語文 (「というのも善と正義は我とともにあるのだから」) で『自省録』(Ⅶ 42) に記録してから、この文型で後代に伝わった。「善と正義」という慣用句はその後、西洋法思想史を貫流するものとなり、例えば『ローマ法大全』「学説彙纂」(AD533) の冒頭にあるウルピアヌス法文にもそれが表れている。「法 ius の語は正義 iustitia に由来する。すなわち、ケルススの見事な定義によれば、法と善と衡平の術 ars boni et aequi である」というように。これをわれわれは、法学のいわば奥義を会得した人間の気概を表出する言葉として受けとめることができよう。われわれも今この

顰みに倣い、日々、高い志をもって法律学の学修にいそしもう。本法科大学院の精神を象徴するメッセージとして、これをいま院生諸君に送る次第である。

謝辞 (刻字)

静岡大学法科大学院は、静岡大学法科大学院支援協会を通じ、静岡県弁護士会、静岡大学文理・人文学部同窓会をはじめ、地元の政界、経済界、教育界、労働界など各界、有志個人の方々から大きな支援を受けて、施設・設備の充実を図り運営しています。ここに、支援をお寄せ下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

2006 年３月

第１回国際シンポジウム「国際化が進む地域社会 法律家にどのような役割が期待されるか」開催

法科大学院　田中克志

平成 18 年３月 26 日、法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム補助金の交付を受けたプログラム「地域の国際化に対応する教育プログラム開発」の活動として、第１回の国際シンポジウムを、新潟大学及び北海学園大学の法科大学院との共催にて行ったが、法科大学院学生をはじめ 90 名を超える来場者が会場を埋めた。

物づくり大県・静岡県にみられるところであるが、その産業構造のゆえ、地域企業がアジア等に経済進出する「外なる国際化」と、外国人労働者等が流入するという「内なる国際化」が同時に、しかも急速に進行している。地域社会を担う法律実務家にとっては、こうした国際化にともなう法律問題・法的需要に対応し得る法的見識と国際的視野を有することが必要であって、こうした法律家を育成する法科大学院教育の在り方を、三法科大学院が共同で検討し、教材研究・開発を行うことが、先のプログラムの狙いである。そこで、まずは、「外なる国際化」の実情・現状、あるいは交流国 (今回は中国であったが) の法文化を認識・理解することを目的として開催された「国際シンポジウム」であった。

パネリストとして登壇をお願いしたスズキやヤマハの法務担当の望月幸男さんと伊藤知生さんには、海外法務の展開や現在抱える法律問題などを紹介し、さらにはこれからの法律家への期待を語っていただいた。静岡大学と交流が深い浙江大学法学院の王冠璽さんと通訳の朱曄さんからは、中国における外国法継受の特質について、さらに岡山大学の張紅さんからは、中国新会社法の整備と欧米の法律家 (弁護士) と比較しながら法律家の役割についての報告がなされた。

平成 18 年度には、このプログラムの最終年度となるが、とくに浜松地域にみられるような「内なる国際化」にともなって発生している法律問題・法的需要を取り上げる第２回の国際シンポジウムを開催する計画である。第１回の国際シンポジウムと同様、関係者のご協力・ご支援をいただきながら、実りあるシンポジウムとしたい。

法科大学院の近況とご寄附のお願い

法科大学院支援協会事務局長　根本 猛
(法科大学院教授)

同窓会の皆様はじめ地域各界の皆様のご支援のおかげで、平成 17 年４月に開校した静岡大学法科大学院は、初年度を順調に終え、この４月には第２期入学生を迎えました。全国の法科大学院の相当数が志願者集めに苦労するなか、静岡大学法科大学院は、定員 30 名の７倍以上の 229 名の志願者を確保しました。第２期入学生は、その厳しい入学試験を勝ち抜いた 41 名です。このうち、11 名が静岡大学の卒業生です。(なお、前年度は、志願者 97 名、入学生 31 名中７名が静岡大学出身でした)

開校２年目に入り、法科大学院の教育は順調に進行しています。法廷教室や全員分が用意された固定席の自習室など地方国立大学としては破格の環境は、入学生や受験希望者からも称賛の声があがっています。同窓会会員の皆様からのご支援に改めて感謝申し上げます。また、法科大学院棟の玄関に、同窓会はじめ皆様からのご支援に感謝する銘板が取り付けられています。機会がありましたら是非ご覧いただければ幸いです。

さて、支援協会では、法科大学院の教育支援・奨学制度を中心に、平成 16 年末から寄附活動を開始し、平成 22 年度までの５年間で、7,000 万円を集める (今後は概ね毎年 1,000 万円) ことを目標に取り組んでいます。平成 18 年度末で、ご寄附は、436 件、2,983 万円となっています。文理・人文同窓会からも 530 万円のご寄附をいただき、個々の会員の皆様からも貴いお志を頂戴しています。寄附金は、施設の整備、奨学制度の維持、実務家教員の研修などに使わせていただいています。学生たちのなかには経済的に恵まれない者もいて、奨学制度は大変感謝されています。

同窓会誌「岳」の本号にも、「寄附のお願い」のしおりを同封させていただきました。同窓会会員の皆様には、是非しおりをご一読いただいたうえでご寄附を検討願いたく、また、すでにご寄附を頂戴した方にも引き続きご支援いただきますようお願い申し上げます。

会計報告

平成 17 年度会計報告

期間　平成 17 年 4 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日
会計　落合康彦 (人文 13)
監事　大橋昭夫 (人文 2)　小川利春 (人文 5)　早川登上 (人文 9)

（単位：円）

	勘定科目	決算額	予算額	増減	摘要
収入	終身会費	7,474,880	10,000,000	-2,525,120	新入生 326 名 , 既存会員 32 名
	名簿売上代金	143,000	60,000	83,000	名簿 43 冊
	貯金利息	1,272	1,500	-228	定期預金・普通預金
	総会収入	109,000	300,000	-191,000	
	法科支援協会	223,125	204,000	19,125	
	運営基金取崩	7,000,000	7,000,000	0	
	文集売上	3,000	0	3,000	
	小計	14,954,277	17,565,500	-2,611,223	
	前期繰越金	1,035,644	1,035,644	0	
	合計	15,989,921	18,601,144	-2,611,223	

	勘定科目	決算額	予算額	増減	摘要
支出	総会費	193,970	500,000	-306,030	
	会議費	94,300	150,000	-55,700	
	交通費	145,200	250,000	-104,800	
	印刷費	2,291,097	2,400,000	-108,903	「岳」二回発行
	通信費	1,577,662	2,200,000	-622,338	「岳」郵送料
	名簿諸費	919,094	1,000,000	-80,906	デ゛ータ再入力・発行・配送
	支部補助費	2,141,256	2,500,000	-358,744	基本・人数割補助 , 郵送料補助
	大学関係費	5,552,735	5,600,000	-47,265	模擬法廷、奨学金、研究補助金
	小集団活動	181,165	200,000	-18,835	9 件
	全学同窓会	0	100,000	-100,000	立替
	運営基金	0	0	0	
	事務所費	1,783,900	1,800,000	-16,100	人件費・事務用品費
	諸支出	30,420	200,000	-169,580	法科大学院・祝儀
	小計	14,910,799	16,900,000	-1,989,201	
	次期繰越金	1,079,122	1,701,144	-622,022	
	合計	15,989,921	18,601,144	-2,611,223	

平成 17 年度貸借対照表

平成 18 年 3 月 31 日現在

（単位：円）

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
(資産の部)		(負債の部)	
流動資産	10,079,122	未払金	0
普通預金	4,194,878	負債計	0
定期預金	5,000,000	(正味資産の部)	
未収入金	563,984	積立金	9,000,000
立替金	320,260	運営基金	9,000,000
固定資産		余剰金	1,079,122
敷金	0	固定資産	0
		本年度余剰金	1,079,122
		正味資産計	10,079,122
合計	10,079,122	合計	10,079,122

財産目録

平成 18 年 3 月 31 日現在

（単位：円）

摘要	金額
(資産の部)	
流動資産	
普通預金 (しずおか信用金庫 No.1009195)	432,267
(〃 No.151796)	3,404,149
(〃 No.195831)	358,462
(郵便局 No.56867)	0
(〃 No.105137)	0
定期預金 (しずおか信用金庫 No.464666)	3,000,000
定期預金 (しずおか信用金庫 No.469438)	2,000,000
未収入金 (平成 17 年度終身会費＋法科支援)	563,984
立替金	320,260
固定資産	
敷金 (本部事務所)	0
資産の部合計	10,079,122
(負債の部)	
流動負債	
未払金	0
負債の部合計	0
差引正味財産	10,079,122

平成 18 年度予算

期間　平成 18 年 4 月 1 日～平成 19 年 3 月 31 日

（単位：円）

	勘定科目	予算額	前年度予算	増減	摘要
収入	終身会費	8,000,000	10,000,000	-2,000,000	新入生 350 名 , 既存会員 50 名
	預金利息	1,000	1,500	-500	
	名簿売上	60,000	60,000	0	3000 円× 20 部
	総会収入	0	300,000	-300,000	
	法科支援協会	204,000	204,000	0	人件費
	運営基金取崩	2,000,000	7,000,000	-5,000,000	
	小計	10,265,000	17,565,500	-7,300,500	
	前期繰越金	1,079,122	1,035,644	43,478	
	合計	11,344,122	18,601,144	-7,257,022	
支出	総会費	0	500,000	-500,000	
	会議費	100,000	150,000	-50,000	
	交通費	200,000	250,000	-50,000	
	印刷費	2,400,000	2,400,000	0	「岳」発行 , 宛名シール
	通信費	2,000,000	2,200,000	-200,000	「岳」郵送料
	名簿諸費	1,000,000	1,000,000	0	学生名簿送付、終身会費登録
	支部補助費	2,300,000	2,500,000	-200,000	北陸支部設立
	大学関係費	860,000	5,600,000	-4,740,000	研究補助費、奨学金
	小集団活動補助金	200,000	200,000	0	
	全学同窓会	100,000	100,000	0	
	同窓会運営基金	0	0	0	
	事務所費	1,800,000	1,800,000	0	人件費ほか
	諸支出	50,000	200,000	-150,000	
	小計	11,010,000	16,900,000	-5,890,000	
	次期繰越金	334,122	1,701,144	-1,367,022	
	合計	11,344,122	18,601,144	-7,257,022	

※科目間の流用を認める

東京支部

第 25 回東京支部総会

第 25 回東京支部総会は 6 月 9 日 (金) 午後 6 時からアルカディア市ヶ谷 (私学会館) において開かれた。過去 6 回開催の東京ステーションホテルは東京駅が国の歴史的建造物として本年 4 月から復原工事に入ったため、今回初めて当所にて開催の運びとなったものである。眼下に外堀を望む明るい会場である。

司会は西原妙子さん (人文 8 独)、三神哲也兄 (文理 5 法) の異色のコンビ。支部長挨拶に続き物故会員の黙祷を行う。東京支部はこの数カ月の間にかけがえのない人材を失うことになった。米山益弘 (医進 1)、川口和夫 (文理 5 仏)、井上隆道 (文理 3 仏)、伊木誠 (文理 7 経) の諸兄の霊に心からの哀悼の意を捧げた。

議事に入る。

1　2005 年度事業報告及び 2006 年度事業計画案、2　2005 年度会計報告及び 2006 年度予算案を承認。3　新役員として吉川駿副支部長 (文理 12 経) 及び伊藤英敏副支部長 (文理 13 法) を紹介、気鋭の両君には支部の活性化に取り組んで頂くことを期待している。

議事を終え、来賓の御挨拶を頂く。

先ず松田純人文学部長。学生は「生きた"知 " の発見、地域社会を " 歩き学ぶ "」をモットーに、キャンパスの外へ出て現場で学ぶフィールドワークを実習していること、先般一卒業生から一千万円の寄付を受けたので、更に広く寄付を募り奨学資金の基金を設けることにしたと語られる。

次いで土屋公献旧制静岡高等学校同窓会長。大学がしっかりして卒業生がしっかりしていることが何よりと大学の益々の発展に期待を述べられる。土屋会長は昭和 18 年 (1943) 旧制静高入学、学徒動員後復学、23 年卒業。来年は静高創立 85 周年、もうこの辺で幕を引こうという意見もある一方、90 周年に向け最後の一兵まで頑張ろうという声もあると場内の笑いを誘う。とても 83 歳とは見えぬ若々しさである。

鈴木基之同窓会長からは最近の同窓会の動向について報告がされる。

懇親会に移る。

代わっての司会は三神兄。吉川副支部長の発声で乾杯。暫時歓談の後来賓挨拶。西から順に岩本平関西支部長、水野裕之東海支部副支部長、袴田克弥浜松支部幹事、石神政一静岡支部長が各支部の近況を報告。岩本兄は静岡で途中下車、今回体調を崩し欠席された田邊郁子さんを見舞われたとのこと。毎年欠かさず東京支部総会に参加されている田邊さん、もう殆ど回復された由、来年以降も是非元気なお姿を見せてくださることを期待したい。金森誠也先生は今年もお元気そのもの、変わらぬエールを送ってくださる。

三神兄の巧みな進行で会が大いに盛り上がる中、池田順次兄が指名され竹島問題のクイズを出す。核心を衝く設問に一瞬緊張する。遠藤栄兄は「井上さんを偲ぶ会」の参加を呼び掛ける。岩手から参加の佐々木兄がベートーヴェンの第九を歌い、三神･福岡が加わる。人文代表として恵良直裕君 (3 法)、文理の若手野村敏治君 (15 経) が指名される。堀江析而兄が金利について意見を述べる。二時間半が瞬く間に過ぎる。最後は恒例の寮歌斉唱。今回は代表寮歌「地のささめごと」に、井上さんの好きだった「ゆたけき胸の」を加えた。故人の俤が去来し忘れ難いひとときだった。伊藤副支部長が閉会の辞を述べ散会する。

今回の参加者は文理 33、人文 3、計 36、昨年より 6 人減となった。関東地区がこの日梅雨に入り朝から雨だったこと、会場への交通がが多少不便になったこと等も原因の一つと考えられるものの、相変わらず人文の諸君の参加の少なさに課題を残した。特筆すべきは初めての女性司会者に西原さんという適材を得て和やかなムードの中会が進行したこと・・それにしても女性の参加者が西原さん一人とは・・また後半は三神兄の力強いサポートで活気溢れる会になったことである。参会者は夫々の思いを胸に会場を後にされたことであろう。来年以降に明るい展望が開かれた思いがする。

(東京支部長　福岡　記)

東京支部会員の近況

6 月 9 日支部総会出欠葉書に書かれていた
東京支部会員の近況
(順不同、出・欠は支部総会への出欠)

吉川　紀一　文 3 法　欠
50 年の勤めを終えて一年余がたちました。健康はほとんど問題がありません・千葉大での生涯学習活動、地域での行政相手にするボランティア運動のリーダーなど多忙の日々を過ごしておりますが、夫婦で大好きな旅行は今年になってからも北海道へ流氷見物や中京、関西への花見などまめに出かけ、7 月に英国旅行も申し込みました。
(現役時代世話になった方の懇親会と重なり出席できません)

長谷川光司　文 2 法　欠
高血圧のため体調不良につき欠席します。

大成美知子　文 10 英　欠
民生委員 5 年目となり、自身も高齢ながら何とか仕事を続けています。ご盛会を祈ります。

小田島文一・鏡子　文 14 法・経　欠
どうしても都合がつかないので欠席します。幹事の皆様、いつも有難うございます。心から感謝申し上げます。

湯川　正孝　文 6 数　欠
去年は病気で大変でしたが今は元気です。都合で出席できません。来年はきっと出席します。

佐々木　儀　文 8 経　出
岩手県の昨年の雪は大変なものでした。日に 4 度も雪掻きせねばならず、へとへとの毎日で、いったい春は来るんだろうかと疑った程です。今 , 外は新緑と陽光ポカポカ。あの積もった雪は幻のように思えます。年々冬越が身体にこたえるようになりました。今度の冬は無事に乗り切れるかしらん？

中島　鎮夫　文 7 法　欠
健康に恵まれ、元気でボランティアとして、障害者の作業所で働いています。

細島　博元　2 化　欠
毎年お誘いいただき恐縮です。ご盛会を祈ります。

石田　功　文 12 経　欠
定年で自宅・年金生活です。

辻　庸良　文 3 経　出
今年で卒業 51 年になりました。衰えた心身を酷使しながら未だ働いています。しかしこのところ腰痛で苦しみつつあり、そろそろ限界か？

渡里　彰　工進 7
平成 18 年 2 月 17 日に亡くなりましたのでよろしく御願い致します。生前のご厚情、心より御礼申し上げます。　―ご遺族

清瀬　直也　文 4 法　欠
先約のため欠席致します。同窓会が盛大に挙行されることを心より祈念いたします。

名取　金昭　文 1 経　欠
今年の総会は出席予定でおりましたが、九州の山へ行く日程がズレこんでしまい、久住山に登る日と重なってしまったので欠席します。盛会を祈ります。

小塚　茂雄　2 工進　欠
ご無沙汰致しております。勤めていた川崎重工業を定年になって早や十数年になります。

橋本　益男　文 9 数　出
いよいよ最後のコーナー。いかに駆け抜くか？

佐藤　吉元　人 3 経　欠
この 3 月末で勤めは辞めました。知人十数人と「元気な町と仕事づくりの会」というのを作っ

て活動を始めています (東京都に NPO 法人の申請をしています)。リタイアした皆さんの社会貢献や楽しみのための活動を企画しています。

久保田　隆生　文５経　欠
古希も過ぎ、ささやかな趣味やボランティアを楽しむこの頃です。盛会を祈念いたします。

近藤　正巳　文３法・文６史　出
「弱肉強食」の世界を批判し、「九条」は擁護します。時に介護施設で見てもらう以外、妻を家で介護し、二人で共にすごしています。

池谷　清彦　文８経　出
高齢化社会に入りますが、古希にしてフルタイムで仕事をしております。余暇はゴルフ、海外旅行などを楽しんでいます。健康管理に留意し、このペースを維持していきたいと思っております。

三沢　利美　文 11 法　欠
皆さんに会えることを楽しみにしていましたが、抜けられない用事ができましたので失礼します。

長田　伸豊　文６化　出
音楽会や催し物などに出かけるようにしています。勉強に対する意欲はあるんですが、如何せん、忘れる方も天下一品。歳を感じます。

石田　恒明　文６法　出
お世話様です。

酒井　厚幸　文６経　欠
市民農園で野菜栽培を楽しんでいます。その他ボケ防止、健康保全の為英会話、囲碁、ウオーキング等をしています。

福岡　　厚　文７法　出
首都大学東京 (旧東京都立大学) の科目等履修生生活も５年目に入りました。目下史学演習で平安貴族の日記 (藤原行成・顕広王) を読んでいます。３月半ば、４日間ほど飛鳥の地を歩いて来ました。伝板蓋宮跡や石神遺跡の発掘現場に立会い、古代王権の興亡に想いを馳せました。

神谷　一男　文４経　欠
地域福祉活動団体の一員としてささやかに活動しています。

窪田　重忠　文 13 経　欠
定年退職者となっております。

戸崎　延子　文３経　欠
井上隆道さんのご逝去、本当に残念でした。静大の寮歌をうたって送ってくださったのが感激でした。さびしくなりますね。同窓会、昼間でしたら参加したいと思いますが、皆さんにどうぞよろしく。

赤川　　勇　５工進　出
幸い健康に恵まれ、天候と時間が合えば山野を歩き、季節の自然に触れることを楽しみ、その合間で、７日前後 / 月の仕事 (JIPM-S 委託) を続けています。今年は飯豊山に登ってみたいと思っています。

小池　理勝　文８経　欠
自由時間を思いきり満喫しています。

大石　雅士　人 23 経　欠
おつかれさまです。当日は仕事のため欠席いたします。同窓会活動には多忙のため参加できませんが、会報をいつも拝読させていただいております。

東儀千鶴子　文３英　欠
いつもお世話になっております。オバアサンになるのは仕方がないことですが、介護を受けないですむように、よく歩きます。こちらに来て 28 年、近隣の古い歴史をハイキングサークルで楽しんでおります。先ず足を元気にと思いつつ ...。

橘　　勝也　３医進
昨年 11 月 28 日永眠しました。今までのご厚情を感謝いたします　一ご遺族

折井　　勉　文２法　出
人文の皆様の出席で同窓会の活性化が求められています。つながりのある人との電話、連絡、ダベリが大切かと思います。

井村　謙一　文８経　欠
今の状態では手術跡の痛みが消えず、出席できる自信がありません。

田代　和則　文 11 法　欠
翌日早朝から東北方面へ地区の同業者との旅行があり、幹事として体調・連絡等を考えて、残念ながら今年は欠席させていただきます。

池田　順次　文１経　出
日露戦争での捕虜収容所の研究を再開しました。北は弘前、秋田から南は松山、熊本まで、全国 29 箇所 (約８万人) の収容所の跡地を実地調査する計画を立てて第一歩を踏み出しました。実地調査の前に、各数日間かけて国会図書館や IT 検索そのほかで事前に文献調べをしておかねばならず、時間と経費を如何に節約するか、悪戦苦闘の毎日です。

房野　照一　文 13 経　欠
吉川さん、伊藤君のご活躍を。来年からはもっと前向きに参加できると思いますので宜しく。

松野　達雄　文５経　欠
現在東京都三鷹市で漂流中です。

三好　玄洋　工進１　欠
健康維持につとめています。・毎朝のバランステスト、ストレッチ、筋力トレーニング、合計 25 分・週２回各２時間～４時間テニス・日常の外出は自転車のみ・毎朝ではないが大磯海岸へ自転車走行・食事は腹六分目

山田　米一　人５法　欠
田中県政下、06/4 月から全国一の給与カット率はなくしましたが・・・・・「全廃」提案中です。

田中　誠一郎　人５法　欠
名古屋へ単身出稼ぎ中です。

関本　和男　文２経　欠
家内が２月に２度目の脳出血で倒れ、リハビリ中の厳しい状況なのではなれるわけにいかず、残念ながら欠席します。盛会を祈ります。

土橋　　宏　文３法　欠
平成 17 年 10 月、卒 50 年懇親会を静岡で開催。24 名が参加。鈴木同窓会長も出席され、大いに盛り上がりました。「次は喜寿で会おう」の合言葉で散会。元気で頑張ろう。

西尾　克彦　医進４　欠
胃癌で手術 (1999) 後、現在尚インターフェロン継続中。

中溝　　浩　文８経　出
司法書士中溝事務所を開設して６年目になりました。お近くにお越しの際はお立ち寄りください。地下鉄九段下駅前、５番出口、マクドナルドの上。

三神　哲也　文５法　出
八千代九条の会と八千代男声合唱団参加で日々過ごしております。

堀江　析而　文４経　出
政府は 2015 年までの 10 年間で、年平均 2.2% 以上の実質経済成長率を目指すとしていますが、低い。3% を目指すべきです。決め手はソフトウエアです。潜在需要は無限です。

池谷　秀雄　文５英　欠
大岩宮下町は遠くなりました。

龍口　和也　文 13 経　欠
同郷の先輩 (吉川さん) や同級 (伊藤英敏君) など頑張って東京支部同窓会を盛り上げようとしているのをみて、今回しばらくぶりに参加してみたい。目下退職３年目にて、健康管理に軸をおきつついくつかのボランティア活動 (出生地高森町関東支部役員など) をやらせていただいています。

山下　悦男　文５法　出
・長年懸案であった「静岡大学学生新聞」の総集編 (昭和 27 年３月５日創刊 ~ 平成２年 11 月 12 日号終刊) を CD - R として完成することができました。永久保存版として座右に置き、手軽に閲覧参照できます。　・毎年８月に開催される書道研究「小石会」の書道展に師範・審査会員として出展する作品に取り組んでおります。　・広島、長崎、サイパンを訪ねる旅も今春完了しました。

山内　正之　文 12 経　出
日曜日生活も４年経過しました。水泳に打ち込み、時々ネットで株を売買し、MLB のテレビ観戦を楽しんでいます。

小塚　茂雄　工進２　欠
御無沙汰致しております。勤めていた川崎重工業を停年になって早や 10 数年になります。

久保田　隆生　文５経　出
古希も過ぎ、ささやかな趣味やボランティアを楽しむこの頃です。

日下　民夫　文６法　出
私 (文理６法) の同窓会関与は、人文卒の方々が多数同窓会に参加され、新旧 OB の交わりの中でお互いに活力を得て明日を歩むことができたらということであります。人文卒の OB の方々 Willkommenn.。酒を酌み交わしましょう。

猪股　和夫　人 11 独　欠
この度「父の国ドイツ・プロイセン」という翻訳書を慧文社より上梓いたしました。ヒトラー暗殺事件に連座して処刑された父の生涯を末娘が描いた本格ノンフィクションです。

＜以下毎年のように出席してくださる元教官、元事務官＞

河中　二講　元教官　欠
静岡大学卒業 (出身) の皆様の御健勝と御活躍を期待しています。小生加齢する中で少しづつ元気で研究と趣味 (歌) に一日一日を過ごしています。昨年秋には高齢ゼミ生 OB の方々とお会いできました。

金森　誠也　元教官　出
割と元気に著作活動にはげんでいます。1 週 3 階位プールに行って泳いでいます。年寄りの温水です。

愛野　明宣　元大学監事　欠
２年間の国立大学監事の任務を満了し、現在は一市井人としての生活を始めました。趣味を中心の生活の気楽さを感じています。10 年余の東京支部のかたがたとの濃密な交わりを、感謝とともに思い起こしています。

田邊　郁子　元仰秀寮事務　欠
欠席の御返事をするのが大へんに残念です。皆出席がとうとう止まることが ...。無理すれば出席できると思うのですが、万一にもと考えるとやはり勇気を出して思いとどまることにいたします。今年は悲しいことが続きました。井上隆道様、伊木誠様、まだまだ若い静岡の松田和典様と御別れしたことです。残されたものはなおいっそう務めて同窓会を守っていきましょう。私も来年は必ず健康で皆様にお逢いする様につとめて参ります。

井上隆道さん・伊木誠さん逝く

５月、東京支部に悲報が相次ぎました。17 日に井上隆道さん (文理３仏)、29 日に伊木誠さん (文理７経) が逝去されました。痛恨の極みであります。ここに謹んで哀悼の意を表し、弔辞を捧げます。

弔辞

井上さん。長い間本当にお世話になりました。有難うございました。あなたは、常に同窓会を支える柱であり続けてくださいました。目立つ大黒柱というよりは、むしろ床下を支える力強い存在でした。私どもはその上に立って安心して様々な活動を行って参りました。最近の例でいえば、静岡大学開学 50 周年の各種記念行事、中でも記念誌『大岩発大谷へ』の発行は、井上さんのお力があって始めて成し遂げられた記念すべき事業であります。

３年前、あなたの肺が癌細胞に侵されていると知ったとき、いつかは今日のような事態がくる事を予感はいたしておりました。今、その事実に直面して、失ったものの余りの大きさにただ呆然とするばかりであります。

思えば私の場合、井上さんとのおつきあいは近々十数年程でしかありません。もっと早くから知り合っていたら私の人生は遥かに充実したものになっていたことだろうにと残念でなりません。聊か私事にわたりますが、井上さんを引き合わせてくださったのは大学で井上さんと同期の馬場泰男先輩であります。素敵な男がいるよと教えてくださいました。ほどなく井上さんから数冊の『大地』が届き、なにか書いてみないかとお誘いを受けました。翌年恐る恐る投稿し、同人に推薦され、同窓会事務所に井上さんを訪ね、そこで池田順次さんを始め素敵な仲間に巡り会いました。遅蒔きながら同窓会活動をお手伝いする内、いつか東京支部長という大役を引き受ける羽目になったのであります。全て井上さんのお人柄のなせる業であります。

私も 70 歳を過ぎて、時に死について考えることがあります。人の生死に思いを馳せるとき私はよく晩年のゲーテがエッカーマンに語った言葉を思い出します。ワイマール近郊の丘で落日を眺めながらゲーテはある古い詩を引用します。「沈み行けど、しかもいつも変わらぬ太陽である。」というものです。そして続けます。「75 歳にもなると時折は死について考えずにいられない。死について考えると全く穏やかな気持ちになる。なぜなら我々の霊魂は全然消滅しないと確信しているからである。それはたえず永遠から永遠へ働き続けるものである。丁度太陽のようなもので、我々人間の目には没するように見えるが、実は決して没することなくたえず輝き続けている」と語るのであります。

井上さんがこの世からいなくなっても、井上さんのなされたお仕事は我々の元に残っております。我々はそれを受け継ぎ、その芽を伸ばして行かなくてはなりません。そして、いずれあまり遠くない日にあの世で再会したとき、ちゃんとやってきましたと報告出来ればと願っております。

有難うございました。どうぞ安らかにお休みください。

平成 18 年５月 19 日
静岡大学同窓会東京支部長　福岡　厚

お悔やみの言葉

大学時代からの友人の一人で、ご紹介いただきました松田でございます。

ご親族の皆さん、伊木誠君のご逝去、心からお悔やみ申し上げます。

故人・伊木誠君とは、昭和 30 年４月からの４年間、静岡大学の学生寮「仰秀寮」で同じ釜の飯を喰い、或る時は生活費を融通し合い、また或る時は背広を貸しあったりし、多感で希望にあふれ、未来の時代を信じて学業と自治に専心した時からの、心から信頼できる親友であり仲間でございます。

日々の寮生活は、どんなことも全員参画で、とことん話し合い、結論が出なければ夜を徹してでも議論して纏め上げ、そのうえで実施・行動すると言う、完全自治を遂行するものでございました。

寝食をともにしていましたので、いろんな思い出が幾重にも重なりあい、いまでも走馬灯のごとく浮かんできます。この４年間の寮生活が、われわれ個人個人の人間形成の基礎と自覚となり、卒業後それぞれの道に進んで行きました。そんな中で、伊木は、人の話を聞き、相手の立場を考えながら自己の主義・主張をしっかりとしてゆくという、教育的でリーダー的な優れた才能をもっていました。また、その才能を寮生活の中でも、いろいろな役割を担い、遺憾なく発揮していました。

その後、大学院を経て、学究人生に邁進・精進して行くことになりましたが、それは彼の天職であり、その後の業績・社会的貢献は皆様周知のとおりでございます。

ここで彼の功績で、彼を中心にして我々が自慢できることを披露させていただきます。それは我々同輩が、それぞれ家庭をを持ちまして 40 数年になりますが、卒業後この間続けています最低年一回の家族旅行です。これは彼のリーダー的纏め役があってこそ実現でき実行でき、続けられているものです。

まだ、それぞれの子供が若年のころは、総勢 30 名近い集団旅行でしたが、本当に楽しく、彼の優れた企画力と実行力の賜物とみんなで感謝しています。

この 10 年位は子供も一家の主となり、老夫婦だけの気の置けない旅行となりましたが、半世紀に及ぶ人生を語るにふさわしい楽しみな行事として誇りを持って続けています。

しかしこれからは、まとめ役である君がいないと思うと本当に寂しい。

伊木よ！　本当に長い間、病魔・癌ともよく戦ったね。４年前の旅行は、北北海道の利尻・礼文島でしたが、その旅行の２週間前に最初の手術をして、術後の傷あとを見せながら、酒の肴にして話し合ったのが癌との闘いの最初でした。

そしてその後会うたびに「癌よ、お前が暴れると俺も苦しいがお前も苦しむんだから、仲良く共存していこうや」と癌に語りかけているんだと言っていたのが、耳に焼き付いて離れません。これは現状認識がしっかりとできる君の精神的なたくましさだと思う。ある意味では、現状を冷静に分析して的確に判断し、その上で最善の努力を実行するという、君の行き方そのものと感心する次第です。

伊木よ、長い間ほんとうにご苦労さんでした。貴方が残してくれた数々の功績を我々仲間が、しっかりと継承してゆきますから安心して見ていて下さい。

最後に多感で情熱と希望にあふれていた若き学寮時代に、うれしいときも悲しいときも、また楽しいときも落ち込んだときも、いつも蛮声を張り上げて斉唱した仰秀寮寮歌「地のさざめごと」の歌詞一部を君の前で朗読してお別れとしたい。

地のさざめごとひめやかに
安部の川瀬の奏でれば
芙蓉の峰は厳かに
雨の黙示をもらすなり
ゆかしの陵や静陵は
高き望みを冨士ばらの
匂いにこめて集いこし
我等が館そびゆなり

さようなら。

平成 18 年 (2006)6 月２日
友人代表　　松田良伸

旧制静高 創立八十五周年記念大会は 平成 19 年 6 月 10 日 帝国ホテルで

旧制静岡高校同窓会は、創立八十五周年記念大会を平成 19 年６月 10 日 (日曜日) 午前 11 時から午後３時まで、帝国ホテルの冨士の間で開催することを決定した。

旧制高等学校は、第２次大戦後の学制改革により新制国立大学に移行する形で廃止された。それから 55 年、旧制高校同窓会は会員の多くが死去され、健在な方々も老齢化されてきた。しかしわが静岡では、静大文理学部同窓生有志が旧制静高同窓会の幹事会に加わり、活動の活性化に協力している。この八十五周年記念大会に静大文理・人文学部の同窓生も多数参加して成功させたい。

記念大会の詳細案内は次号「岳」に掲載される予定です。　　(文理１回 池田)

静岡支部

平成 18 年度文理・人文学部同窓会 静岡支部総会開催される

6月3日(土)17時〜　　静岡支部長　石神政一

会員の皆様には、本総会にご出席いただき有難うございます。日頃、皆様には、同窓会活動にご理解とご協力をいただき感謝申し上げます。

又、松田人文学部長様、中村法科大学院教授様、鈴木同窓会長様はじめ、多数のご来賓の皆様には、公私とも大変お忙しい中、しかも遠路ご臨席を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

さて、ご案内のとおり、母校静岡大学が国立大学法人としてスタートし、はや２年が経過しました。

この間、大学におかれては、教育の質の充実や研究水準の向上を目指しつつ、改革を推進する努力をされてこられました。

実は、私も町内会の仕事に携わっておりますが、昨年秋には、天岸学長が私どもの地域に来られ、「駿河区の魅力と地域づくり」と題する講演をされました。このように、学長が地域づくり、まちづくりについて語られたこと、そして、その講演の中で大学と地域の連携を強く説かれておられたことが、印象に残っております。

又、東海地震の切迫性が指摘され、防災対策は住民や地域の最も大きな課題の一つとなっておりますが、大学におかれては、法人化と同時に防災・ボランティアセンターを開所し、防災問題を中心に、地域住民との連携を強化する努力をされていることも承知しております。

地方の時代といわれる中、今後、産・官・学そして民をとりこんだ連携を強化し、地域全体の総合的な力を発揮するための努力にも大いに期待いたします。

一方、静岡大学に法科大学院が設置され、こちらは、１年が経過しました。地域と連携し、地域に貢献することを設立の理念としてスタートした法科大学院は (2 年目を迎えましたが)、社会経済環境が大きく変化する中、地域の特性を反映した法的需要に対応できる法曹実務家の養成など、その養成教育の一層の充実に努められ、いわば地域の司法の充実という期待に応えていただきたいものです。

会員の皆様にも夫々のお立場で、引き続き静岡大学法科大学院支援協会へのご協力などをお願い申し上げます。

いずれにしましても、当支部は同窓会本部との連携のもと、母校の更なる発展のため、母校との関係をより親密にするため努めてまいりたいと存じます。

本日は、総会の後、松田人文学部長様から、新しい学問の動向「人文学部の最近の取り組みから」と題するご講演をいただきます。ご期待下さい。

懇親会では、人文３人、理学２人、農学１人計６人の在学生によるバンド演奏を予定しております。いわば全学からの在学生の参加をいただき、その在学生との交流をはじめ、同窓生同士の実り多い懇親会となることを念じて、私のご挨拶とさせていただきます。

生涯学習の中での歌 (言語で熱唱) (河中二講先生を囲む会)

文理 12 法　愛野明宣

フランス語で、また日本語でシャンソンが、イタリア語でカンツォーネが、スペイン語でアルゼンチンタンゴが、それぞれピアノ伴奏で店内に朗々と、また感情豊かに響く。さらに日本の謡曲が謡われる。

82 歳の誕生日を５日後に迎えられる河中先生、そしてゼミ生にとっては忘れられないご夫人のお二人を主賓にして、70 歳半ば (文理２回卒) を筆頭に還暦目前のゼミ生 (人文２回卒) まで、遠くは札幌、名古屋、静岡から、関東中心に 15 名が集まった。

「生涯学習」が言われて久しいが、まさに豊かな人生を象徴する発表やお話のオンパレード。話題になった言語を列記すると、フランス語、イタリア語、スペイン語に追加して、ロシア語、英語、ドイツ語、中国語 (漢詩)。

先生の叙勲のお祝いから４年ぶり、第９回目となる「河中二講先生を囲む会」が、10 月１日、東京四谷三丁目の「ウナ・カンツォーネ」で開催された。

グラスを傾けながら、まずは河中先生の歌、続いてプロのシャンソン歌手杉浦美恵さんの歌、そして出席者のお話や出し物、時間は 12 時 30 分から、まだまだ尽きない中で終了はなんと 16 時。

感情一杯に熱唱中の河中先生

社会人としての忙しい人生の中で、それぞれに時間をかけた楽しみを持ち、なんと充実した生活を送られていることであろう。肉体的に健康でいられると同時に、心の健康にも心がけてこられたことが、参加者全員から強く窺われたことである。

次回の開催は、それぞれが年配者ということもあり、３年後と決まった。さらにその先、先生の米寿のお祝いへと続くよう、互いに健康を祈念しつつお開きとなった。

(シャンソン等の題名)

ロレットの店、ユーカリ、ノスタルヒアス、カルーソ、平原の故郷、パリの空の下、枯葉、ミラボー橋、チキリン･デ･バチン、カリブの恋の物語、オ･ソレ・ミヲ、鶴亀

(参加者)

河中二講先生ご夫妻
文理 ２回　佐野　哲
文理 ３回　曽我良勝
文理 ６回　小嶋清美
文理 ７回　小玉重光、中島鎮夫
文理11 回　田代和則
文理12 回　愛野明宣
文理13 回　伊藤英敏、望月圭二
文理14 回　小形耕八
文理16 回　鈴木検事、高橋建雄、八木　博
人文 １回　向井俊夫
人文 ２回　高橋　保

静岡大学文理学部・理学部数学教室同窓会総会開催

文理７数　深見 謙次

文理学部・理学部数学教室同窓会は、今 ('06) 年４月 23 日 (日)、静岡市葵区のマイホテル竜宮で総会を開催した。本会は文理学部理学科６回生を古参に、理学部数学科卒業生へと継承され構成している。文理学部を経て理学部数学教室の教官として長年勤務された生田利治先生が、かつて名簿の原型整備していただいたものを母体として発展させ、これまで教官の退官祝賀に合せて開催してきた。

今回は文理学部 14 回生の伊沢達夫氏が、東北大学大学院修了後に理学部数学教室の教官として勤務され、今春退官されたのを記念して兼ねての開催だった。

理学部の名簿が充分に更新されていない不備もあるが、東は埼玉から西は奈良まで 24 名、大学から来賓として松田稔先生、合計 26 名の出席となった。

同窓会は異業種交流会と認識する現役世代が、出席者の半数以下となってきた現状において、同窓会の存在意義が変遷的に問われるのは当然である。今年２月のホリエモン検証の TV 番組で、かつて彼と対談した IT 先駆者、西和彦氏が語っている録画が放映された中にビジネスの条件として「専門性・勤勉性・健康」を指摘しているのが目に入った。即座に、だから六本木ヒルズ族は崩壊するのだ、と思った。要件 (必要条件) として「社会性」が欠如しているのだ。社会性は社会に有益な見識と言動であり、個人においても、法人・団体等においても、従前に増して重要である。この理念を冒頭の挨拶とした。

さて会は、司会する水口好美氏の軽妙な語り口で進行した。先ず、退官記念品の贈呈セレモニーの後、議事の役員改選では全役員の再任が可決されて紹介と挨拶があり、集合写真撮影 (撮影 : 深見謙次) の後、懇親会に入った。この間において、３副会長 (沢入忠志・佐藤洋一・鈴木冨喜) の挨拶が区切りに配備されて、個性がそれぞれに活かされ充実したものとなった。

懇親会では遠藤幹彦氏の乾杯発声の後、出席者全員が卒年順に演壇に立ち、回顧・近況・職務・提言・趣味などを、感嘆や笑い、そして拍手が繰り広げられる中、熱弁が続いた。名残惜しみながら、一本締めで終了した。

続いて、役員と大学側との懇談の場を設けて、今後の関係や問題点を確認し、大学側の支援を要請した。(数学教室同窓会長)

「追憶」

今回の数学教室同窓会開催に際し、文理学部数学専攻卒業生名簿と宛名シールを松田和典氏 (人文５法) に依頼したのは今年１月だった。その時から日赤静岡病院に入院していたので、代役で間に合わせてもらった。

このシールを使って通知し、同窓会を開催したのは、４月 23 日 (日) だった。この開催を見届けるように当日早朝、彼は逝った。何回か見舞に行った時は、この同窓会のことをたずねてくれていたのに .....。

同窓会本部の会報・名簿の実務担当として重責を負う彼との出合いは、20 年前の海野徹氏 (人文４経) が県会議員補選に立候補して、草根運動を展開している時で、以来の永い友人だった。

仕事は堅実で、決して他人の悪口は言わず、刃向うことを知らない誠実な人柄は、人から頼りにされた。結果として早めたのだろうか？

翌４月 24 日の通夜で、和尚は 20 年早すぎると説教したが、20 年どころか 30 年の第二の人生が待っていた。

隔年開催の悟寮会でも世話になり、彼は弟のような存在だっただけに、至極残念だ。

東海地区「魁寮の会」開催

平成 17 年 10 月 29 日 (土) 名古屋駅前で定例の「魁寮の会」が開催され 14 人の元魁寮生が出席しました。

冒頭で河合会長から「全国魁寮会」が皆さんのご協力のもと無事終わりました、との報告があり１年半に亘った準備作業から最大の行事“万博見学”を振り返っての思い出話に花が咲きました。なかでも、来賓でご参加していただいた方々 (土屋公献氏・森明彦ご夫妻・市村平一郎氏・田邉郁子氏) のご健在振りには皆な感嘆！話題集中でした。

その後は情報交換を主としたダベリングでしたが、最後にこの会をもっと盛況にする為に今回 (場所・曜日・時間) を変えたのですが皆さんどうでしたか？と云う会長の問いに意見百出、最終的に次回は木曜日の６時からと決まりました。が、「何かテーマを持ってやったらどうだ！例えば皆が俳句を一句ずつ作ってきて発表しあうとか」と云う意見が出され、またまた議論百出 (残念ながら未決定だったかな？) 賑やかに今年の行事が終了しました。

出席者

亀井松壽 (文理 2)・河合俊孝 (文理 2)・内山賢治 (文理 2)・大谷勝則 (工進 27)・松浦晃次 (工進 28)・間瀬晃 (文理 5)・水谷達仁 (文理 7)・土屋修 (文理 8)・加藤秀臣 (文理 8)・余川彬夫 (文理 11)・宇都宮貞文 (文理 12)・和田孝宣 (文理 12)・鈴木徹 (文理 13)・市村平一郎 (旧制静高)

「第５回地域連携 (共同研究) 希望テーマ説明会 – 静岡大学人文系学部は、地域と連携します」を開催

地域社会文化研究ネットワークセンター研究ネットワークセンター長　山本義彦

地域社会文化研究ネットワークセンター研究ネットワークセンターは、これまで本紙でもお伝えしてきましたように、人文学部の地域連携孫口として学部および本文お財政的支援を受けて、活動してきています。昨年度には「みんなの大学」を２号発刊、地域とのかかわりの深い、フィールドワーク教育年次報告書、また本年１月 31 日には静岡市産学交流施設 B-nest で静岡市の応援を受け、家具工業組合との連携で「消費者はいま、静岡の家具に何を求めているのか」を開催しました。当日は多くの業者、市民、関係者の参加を得ました。さらに本年度に入ってから、下記のような取り組みを行ってきました。

４月 20 日に静岡市産学交流センター B-nest で、静岡大学イノベーション共同研究センターと地域社会文化研究ネットワークセンター、人文学部、法科大学院、生涯学習センター共催、静岡県、静岡市、静岡商工会議所、静岡大学イノベーション共同研究センター協力会後援の「第５回地域連携 (共同研究) 希望テーマ説明会一静岡大学人文系学部は、地域と連携します」を開催しました。

当日は学内外から延べ約 100 名の参加があり、定住外国人の共生に関する法政策的研究」、「少子高齢化時代の地域設計」などの全学的文科系の総合的取り組みをはじめ、歴史や文化、NPO と地域おこし、文化系科目の地域による支援と成果、地域振興策としての観光産業の役割、中小・ベンチャー企業における知的財産権の活用など、10 本の取り組みを公開しました。

文化系の地域との連携事業は、理工系の応用分野とは必ずしも同一線上に並ぶものではなく、地域の文化的支援にせよ、行政への支援にせよ、また街づくり支援にしても、「目に見える」作品の展示会というわけには行きません。その点で、今回のような取り組みは貴重であったと思われます。

これらの活動の１つの結果として、法人化した国立大学の厳しい財政事情を考慮すると、今後の外部資金確保の活動としても評価されるでしょう。

イノベーションセンターも今後、この取り組みを始め静岡地区の産学官連携をいっそう強化するために、担当者の常駐を図ることになっています。(以上、「日本経済新聞」2006 年５月 11 日付および「静岡新聞」４月 21 日付を参考にしました)

以上のさまざまの取り組みおよび「みんなの大学」の創刊号以来６号までのすべては、ウェッブサイトでご覧になれますが、相談窓口として利用して頂きやすくするために、このサイトも改善いたしましたので、ご高覧賜れば幸いです。

http://rnc.hss.shizuoka.ac.jp/index.html

駿 遠 会

人文 27 回経済卒　井出千珠子

５月 19 日 (金)、名古屋市内で中部電力株式会社の静岡大学文理・人文学部、工学部、情報学部出身者の同窓会「駿遠会 (すんとおかい)」が開催されました。今年は事務系１名、技術系２名の新入社員を迎え、OB を含む総勢 34 名が参加しました。同窓会は、長い間、文系・理系に別かれて会合を開催してきましたが、より交流を深めようと、３年前より年に１回文系・理系合同で開催しています。開会に当たり、本店総務部長の西村文宏氏 (人文９法) から「インフォーマルな情報交換の意義と価値」に関する話がありました。その趣旨の通り、当日は、普段顔をあわせることの少ない者同士でも、和やかに談笑する姿を会場内のあちらこちらで見ることができ、出身学部に関係なく情報交換できる貴重な場となっています。これからもこの会を大切にし、得られた人間関係と情報を、各人がそれぞれの職場で役立てていけたら良いと思っています。

熊野古道を行く（第６回）

文理９経　小林五郎

９日目　10月16日

６時起床　朝食は始発バスに間に合わないので、おむすびにして頂きリックに収めて外に出た。昨夜の激しい雨も上がり谷間の上空には青空が広がっている。熊野は雨が多いと聞いていたので10日の間には2,3日は雨に見舞われるだろうと覚悟をしてきたが、初日以外は快晴に恵まれ最終日の今日もこの通りの晴天になった。ありがとうと心の中で合掌する。バス停には高校生が二人同乗し、定刻の６時45分に湯の峰温泉を出発した。途中、２年前に来て入った川湯温泉の川原に掘られた”湯船“を車窓に見ながら７時に請川に着く。ここで下車し、小雲取りの入り口に向かう。国道左側には「熊野古道入り口」の大看板が立っていて、その前は丁度Ｔ路地になっているから、何の疑問も感じずＴ路地を歩き出す。道は山を巡って左にカーブし山奥へと続いていて、むこうから一台のバイクが走ってきたので念のため手を上げて止め、小雲取りへの古道を聞くと、なんと全く違う道を歩いてきたことが判った。やはり聞いてよかった。大看板の立っていた所まで戻り、三叉路の角地を調べると、小さい看板に「熊野古道入り口」と書かれている。昨日の大日越えの入り口と同じで、狭い石段をトントンと上がり民家の庭先を通り山道にはいった。請川の標高が56米、頂上の桜峠が466米だから大きな峠ではない。入り口から落ち葉の積ったふかふかの道が続いている。８時になったので、宿で用意していただいたおむすびを食べることにする。竹皮で作った弁当に、握り飯が５個と香の物が少々入っている。昼用に

半分残して、味をかみしめながら食べていると、上から二人のご婦人が下ってきた。こんな早朝にどこから帰ってきたのだろうか。二人は万歳峠に行きたくて上ったが、途中で道がわからなくなり帰ってきたと残念そうに話した。緩やかな上りが続く。中辺路の杉桧の林にかわり、雲取りは圧倒的に雑木林が多い。間もなく着いた松畑茶屋跡はシダ類の生い茂る平地の中にあった。やがて、先刻引き返してきた二人が迷ったという万歳峠への分岐にさしかかる。万歳峠の道は広くて踏み固められているのに、雲取りのコースはすすきが覆いかぶさって道が見えない。行けるのだろうか不安になるが、少し入ると古道らしい道が現れて一安心。雑木林の途切れた間からは前方の山並みが見渡せ、その先にひときわ高い峰がある。あの山がきっと大雲取りだろうと勝手に想像していたが、実際は小雲取りの如法山だった。古道の大半は雑木林で見晴らしは全くきかないが、唯一「百間ぐら」と呼ばれている見晴らしの良い場所がある。そこからは180度の展望ができ、幾重にも連なった熊野の山々が見渡せた。ここから暫くは尾根伝いの道が続く。岩も石畳もなく柔らかな土に積もった落ち葉の道は本当に気持ちが良い。三本杉跡から一時下るが、すぐ平坦な道になる。珍しく桧林があり、少し進むと路上一面が苔に覆われた道に出てきた。京都の苔寺の庭先のようで、苔の上を歩くのに躊躇するが、その苔道の奥には東屋の休憩所が見える。桧の葉の隙間からは、柔らかな日の光が緑鮮やかな苔の上にこぼれ落ちて、あまりの美しさに暫く立ち尽くして見とれてしまう。この上なく贅沢な道、熊野古道。昔からこのよう苔道が存在していたかどうかは知る由もないが、仮に藤原定家がこの場に遭遇したらなんと表現しただろうか。杉桧の道は古道の途中にも沢山あるが、こんな道は滅多にない。やがて桜茶屋跡に着く。前方真下には赤木川が曲がりくねって輝いて見え、川沿いには小和瀬の部落がある。ここからは今までの平坦な道とは打って変わり、谷底に向かって４百米の標高差を一気に下る。下りきった小和瀬は請川と同じ標高64米、今から上る大雲取の越前峠は870米あり、今度は少しばかり覚悟がいる。小和瀬は深い谷間にあり民家も殆どないが、広い立派な道路があり橋の袂には分不相応と思われる公衆便所がある。一キロほど上流に行ったところに小口部落があって、ここから大雲取りの登山口がスタートしている。上り口がわかりにくく、村人に聞いてようやくたどり着く。何故か判らないが、大日越えも小雲取りの入り口もみな同じで、狭い石段を登る。入り口には那智大社14,4キロの標識が立っている。緩やかな上りが続き、やがて鬱蒼とした桧林の中に、円座石（わろうだいし）が横たわっていた。高さ２米、横幅４米くらいの大石の上は平になっていて、ここに円形の敷物を敷き、熊野の神々が座って談笑したりお茶を飲んだといわれている。「わろうだ」とは昔の円形の座布団の意味だという。大石の正面には梵字が三文字刻まれているが苔むしていて判読できない。このあたりは神々のお茶屋所といわれたようで、周囲を見渡すと神々が一休みしお茶でも飲んで談笑するのにふさわしい、神秘的でやさしい雰囲気が漂っている。ゴツゴツした岩や地肌が一面苔で覆われているせいかもしれない。昼食を済ませた辺りの、楠の久保旅館跡からは長く続く石畳の道に入る。次第に急坂になり、両側には杉の大木が繁っていて昼なお暗い感じだ。崩れかけた石畳の上には杉の枯れ葉が積み重なっている。石畳道というよりは一段が20センチから40センチの高さの石段の道で、しかも大半の石段は崩れかけて四角の岩がゴロゴロしている谷川の道に近い。進めども上がれども足場の悪い急峻な石段が続く。汗が全身から噴出してくる。息が切れる。周囲を見ても、道の行く手を見上げても暗い杉林が続くばかりで光が見えない。いつまで続く石道よ！普通の上り坂は自分の意思で歩幅を調節できるが、石段は高さが決まっているので長く続くと脚に応えてくる。膝ががくがくしてきた。途中には素人が書いたと思われる「胴切り坂」の看板が立てかけてある。何故胴きり坂と呼ぶのか判らないが、イメージとしては何となくわかる気がする。上り始めの旅籠より越前峠までの標高差500米がすべてこの石段の道で、蟻の熊野詣の人たちもこの薄暗い石段を列なして上っていったのであろう。大勢で上れば多少気もまぎれるが一人ぼっちの旅だと暗さや疲れに押しつぶされそうになり、頂上の明かりを求めて何度も立ち止まっては上ばかりを眺めている。目を凝らしてみても明るくなっているところはどこにもなく、残酷な石段は上へ上へと連なっている。昨日の大日越えの比ではなく、今回の熊野古道の旅を通じて最大の難所となった。汗がしたたり落ち、呼吸は激しく心臓の鼓動が耳元を痛くなるほど強く打つ。休みたいが、薄暗く、湿った石の上では座るところもなく、立ち止まり呼吸を整えてはまた上る。普通、峠の頂上が近づくと木々の間から明るさが見え、山の稜線がぼんやり見えてくるからそろそろ上り坂も終わりだと判断できる。でも、先ほどから前方を見てそんな兆しを必死で探すが、暗い杉林は無常にもどこまでも続いている。殆ど一直線の上り坂だがやがて左方向に曲がり、その先がかすかに明るくなってくる。よし！ようやく終わりに近づいたぞ！もうひと踏ん張りだ。しかし喜ぶのはまだ早くここからまだ20分近く上ってようやく越前峠にたどり着いた。上り始めてから１時間以上たっていて、これも休まず歩き続けての話で普通に歩けばたっぷり２時間以上かかるコースだ。それにしても大変な石畳の上り坂だった。苔に覆われた小雲取りの道とその対極にあるこの胴切坂は私の記憶の中に長く残ることだろう。頂上付近には越前茶屋跡が残っている。苦しんだ杉林もここで無くなり、前方遥かには幾重もの山並みが見えている。近くに休憩所があり、一休みしてから出発する。下り道は岩肌が露出した足場の悪い道で、昨夜の雨が残っているのか岩間からチロチロと水が流れ出している。滑ることはないが、雨の多い季節では滝になって流れ落ちる川道になりそうだ。下りきるとすぐに石倉峠の上りになる。越えて下りたところはホッと一息つける広場になっていて、その広場の中央を大雲取り山に登る林道が横切っている。広場の片隅に地蔵茶屋跡があり、中年の男が近くにマイカーを止めてのんびり昼食をとっていた。山道の古道はここで消えている。近くの林に古道の入り口があるのではないかと探してみるも見つからない。地元の人に聞くのが一番と、食事中の人に声をかけると、この人が大変な話し好きで、私も若い頃中辺地を越えたこと、小雲取りや大雲取り、さては大日越えもしたこと等聞きもしないことを次から次へと止めどもなく話す。私が聞きたいのはただ一点、古道の入り口だけなのだが、丁度良い話し相手を見つけたとばかりに話しかけてくるので、切り上げるタイミングをはかりかねている。ようやくこの林道を２キロほど進んだところに舟見峠への入り口があり、越前峠よりはるかに容易なことなどを聞き出した。まだまだ話したい様子だったが、先を急ぎたいのでお礼を述べて歩き出す。熊野古道の案内板はすぐ判った。林道から山道に入り、緩やかな上り下りを繰り返すこと40分ほどで舟見峠に着いた。峠からは遠く太平洋が見渡せ、手前の那智湾の右側に突き出した半島沿いに勝浦町の街並みが霞んで見える。手前には今から下る那智大社があるのだろう。思えば９日間かけて泉砂川からはるばると紀伊半島先端の那智までやってきた。しみじみとした思いがこみ上げてくる。下りは決して歩きやすい道ではないが、40分ほどで下りきり、植樹祭会場になった那智高原公園に立った。記念館があり、周囲には若木が植えられているが、近くの車道に那智大社への標識が立っている。この道路が那智大社への道なのだろうと歩きかけて、待てよ、この道は車道で古道は別のところにあるに違いないと思い直して、引き返して広場を探すと対角線上の一角に、見慣れた空色の標識がちゃんと立っていた。中辺路には「熊野古道」の標識が500米ごとに立てられているが、雲取り越えにはこれに加えて空色の標識が立っていた。公園からは石段の古道が大きな杉林の中に通っていて、途中那智の滝の二の滝、三の滝入り口の案内が出ている。那智大滝の上流にある滝で見たい気持ちもあるが夕方も迫っているのでそのまま下る。大社はすぐ着くと思ったが以外に距離があり、急な石段を20分かかりようやくたどり着く。

那智大社と那智青岸渡寺に参拝し、宿坊を訪ねて泊まりを頼むと今日は満員だと断られた。石段を降りたところに民宿が一軒あるから聞いてみたらと教えられ急いで下る。石段横に並ぶ売店や大勢の参拝客を見ながら、その昔、新婚旅行で訪れたことを思い出したが何も記憶に残っていない。かすかに青岸渡寺の姿が浮かんできたが、こんなに沢山の石段のあることは思い出せなかった。下に降りてバス通りを滝に向かって百米ほど歩くと右側に民宿の「美滝山荘」はあった。一泊二食付き8400円で、この旅最後の宿になった。部屋は２階の６畳間和室で、リックを下ろすと暮れつつある青岸渡寺や大社方面を暫く眺めてから風呂場に向かう。6,7人用の広い湯船は小さいタイルが張られていて、中に入ると本物の温泉の感触がする。壁にラドン温泉の効能書きが張ってあり、疲れた体にはありがたい。主人も女将さんも気さくな人柄で、最後の宿でよい人たちにめぐり会えたとうれしく思う。夕食の席には老人と連れの二人が一緒で、熊野古道の話をすると興味を惹かれたらしく細かい事柄をしきりに質問してくる。老人はすでに80歳を越えているようだから歩いての旅は無理だし、京都や奈良と違って車で巡ることも出来ないから聞くだけなのだろう。一緒にいる若い方が私でも歩けますかときくので中辺路のコースは平凡な道だから十分歩けると思います、大変美しいハイキングコースですからぜひ奥さんでもお連れして歩いてみてくださいと薦めておいた。四国遍路もそうだが、自分が大きな感動を受けると誰彼となく薦めて同じ感動を味わって欲しいと思う。

温故知新

文理５法　山下悦男

冬の豪雪のおかげで、今年の北信濃はゴールデンウィークに入っても雑木林に雪が残り、例年にない遅い春の光景を味わった。足をのばして池の平いもり池湿原では、白銀に輝く雄大な妙高山を背景に、水芭蕉が一週間遅れて開花した。二科三湖の一つ青木湖にほど近い居谷里湿原では、渋い趣の坐禅草、純白清楚な水芭蕉、黄色が優しいリュウキンカが一斉に遅い春を告げていた。松本市の城山公園では、メーデーの日に桜が満開で、花吹雪がはかなかった。気候の変化に順応して春を讃歌する美しい自然は、俗塵を払い心を癒してくれる。

水芭蕉など別世界 坐禅草
アルプスの嶺は白銀 花吹雪

広島、長崎についで、この春沖縄を訪ねた。戦時中は浜松市に在住し、疎開もせずに爆弾、焼夷弾、艦砲射撃、機銃掃射と、激しい攻撃を受けて生死の間をさまよった、敗戦焼跡派世代である小生にとっては、戦争の悲劇は二度と味わってはいけない、風化させてもいけないと心に誓い、改めて戦跡を見て回った。資料館も見学した。サイパン島も同様であったが、悲惨な思いは六十年を過ぎた現在でも強烈になるばかりだ。二人の叔父が戦火の犠牲になっている。戦跡には花を献げ非戦を誓った。しかし海は穏やかで美しい。戦争の悲劇も忘却の彼方へと遠去かっていく。

次世代は大戦知らず 波と遊ぶ
戦争は死語となるべし 山笑う

書道研究「小石會」に所属して早や三十年余の年月が過ぎた。（株）講談社で雑誌・書籍の編集に携わり、漢詩や和歌・俳句にも親しんできた。古希を迎えて念願の個展を日本出版クラブ会館で開催した。また毎年恒例の小石會書道展には審査会員として出品している。漢字については、篆書、隷書、草書体、行書体、楷書体など、書体字体の差異があり、さらに個性の発露として、書風の表現が重要となる。仮名についても同じことがいえる。そして何よりも、表現する書作の内容こそ主張の基本である。古典の名筆に学び、書道史もひもといて、さらに探究していくべき書の世界は、深遠であり、心の支えである。

ゆったりと潤墨の起筆 初硯
読誦して一字一字を 夜長かな

留学生に「日本文化」を教えて

人文５法　岩渕康民

2004（平成16）年４月から2005（平成17）年７月まで足かけ２年間、東北大学で留学生に英語で「日本文化」を教えた。

受講生の数は延べにしておよそ80名。国の数は韓国、中国を始めとするアジア諸国やアメリカ、フランスなどの欧米諸国を含めると10数カ国に及ぶ。

この授業は「東北大学短期留学生受入プログラム（通称JYPE）」の一コマで、東北大に数ある留学生用講義科目の中でも10年近い歴史とそれなりの人気がある（と教師が思っている）授業である。

さて本題の「日本文化」の授業に戻ろう。何をどう教えるか。１年に30回という少ないようで多いノルマがあるため、教師はまず悩む。私が取った解決法は次の三つである。

第一に教室だけでは教えないで学外での体験学習を可能な限り採り入れる。この方針に沿った例としては「茶道」「七夕製作」「酒蔵見学」「相撲稽古見学」などがある。

第二に日本の伝統文化もさることながら、「ケータイ電話」「自動販売機」といった現代日本で特に発達した文化（?）も採り入れる。

第三に私がアメリカの大学で学んだ時の経験から、授業は学生が主体的に発表する形式を用いて教師は助言をする立場に徹する。

ある授業でテーマに「ラブホテル」を取り上げた。これだけは体験学習というわけにはいかなかったから、学生の中から何人か代表でホテル見学をしてもらい、後日発表してもらうことにした。

男女３人の学生が手を挙げた。２人でなく３人でラブホテルに行くというところがミソである。

学生たちが選んだホテルは偶然にも前年に別な３人組の学生が選んだと同じく、ある老舗のホテルだった。学生にどうしてそうなったのか聞いたら、色々とホテルをあたったが非協力的なところが多く、そこだけが暖かく迎え入れてくれたのだという。

発表は日本でラブホテルが発達した歴史、建物構造の特徴、利用する客の傾向、変わり種のラブホテルなど実態調査とインターネットを駆使した画像が中心の完成度の高いものだった。

印象に残ったのは３人の中の中国人女子学生のコメントである。「中国では今のところ日本のラブホテルは無いが、日本文化が輸入されて、いつかは中国にも『ラブホテル』（中国語に直すと『同伴飯店』とでもなるのだろうか）が誕生するかもしれない。だが、それを利用するしないは中国人の考え方だから日本のように隆盛するかどうかは分からない」というのだ。

数多い授業の中では笑えない失敗もある。ある日の課外授業で外国人に愛好者も増えてきている「能楽」鑑賞をした。

東京から仙台に来るというプロ能楽師と事前に打ち合わせをして、演目のあらまし、専門用語などを英訳して配っておいた。しかし、学生は本番ではさほど関心を示さない。公演後に特別に舞台で能面や衣装を間近に見る機会も設けたのだが、反応は今ひとつであった。日本人にも難解な台詞やスローテンポの動作は受けないのかもしれない。

以上、簡単に我が「日本文化」の授業のあらましを振り返ってみた。

（元・東北大学国際交流センター非常勤講師。現・仙台市若林区保護課長）

大学だより

本年度の「アッパレ講座」

言語文化学科 日本アジア言語文化コース 助教授　小二田誠二

昨年度後期「情報意匠論」(平野雅彦講師)は、身体表現ワークショップ(小林五郎さんに脱帽!)を含め、積極的な活動を展開し、『静岡新聞』にスーパーもちづきさんの一面広告を掲載すると言う快挙を成し遂げ、TV・ラジオでも何度も取り上げられました。また、前年度の企画から生まれた第1期「天晴れ門前塾」も大きな話題となり、現在第2期を企画中です。

一方、市民開放授業としての「静岡の文化」(小二田)は、社会人10名を含む37名の受講者とともに、秋に静岡で開催される日本近世文学会での企画・展示へ向けて邁進しています。多様で個性的な成果に、是非ご期待ください。

しかし、地域社会では随分と浸透してきたように見える「アッパレ会」ですが、学内・同窓会での認知度はかなり低いと言わざるをえないのも、また現実です。授業でも、発表会でも、一度、覗いて頂ければ、その意義を納得して頂けるものと確信しています。

今後、いっそうの皆様のご支援を、よろしくお願い申し上げます。

就職活動体験記

人文学部言語文化学科 欧米言語文化コース 4年 鈴木康裕

私の就職活動は大学三年次の10月から始まりました。多くの先輩方から「就職活動はすごく大変で苦しい」とか「自分自身の人格を否定される」などさまざまな辛い体験談を聞いていたので、そんなに皆が言うなら辛いに違いないと考えていました。しかし全くそんなことはなく、就職活動は最高に楽しく充実した日々でした。ぼくにとっての就職活動、こんなに楽しい日々はなかったと自信を持って言えます。今日受けた面接や試験の結果が数日後にはすぐに発表される。たくさんの企業を受けるわけですから、次から次へと結果が伝えられて来て、毎日毎日が合格発表や宝くじの当選発表のようなものです。すべてに結果が付いてくるわけで、わくわくしないはずがありません。あの緊張感がたまらなく好きでした。そして、人とのつながりの大切さをとても感じた日々でもありました。数は多くはありませんが、私のエントリーした企業に勤める静岡大学OBの方にリクルーターとして面談をしていただいたり、就職活動のアドバイスや励ましのe-mailをいただいたりもしました。そんな時に静岡大学というつながりの強さを実感すると共に、人と人とのつながりの大切さもとても感じました。

私は中学生の頃からずっと世界を舞台に活躍したいという憧れをもっていましたので、大学4年間を通して時間を見つけてはバックパックを背負い海外へ一人旅に出ていました。そんな経験を通して、本当の意味で世界の発展に関われるような仕事がしたいと考えて就職活動の業界を決めました。まず世界というキーワードをもとに商社、メーカー、物流関係の企業に絞ってエントリーすることにしました。最初は誰もが知るような大手企業ばかりにエントリーしましたが、業界研究を進め、さまざまな企業に興味を持つことで、消費者の視線では知ることがなかった優良な企業とたくさん出会うことができました。多くの企業と出会うことで、自分の中での選択肢が広がりましたし、その会社の社風や強みというのを敏感に感じることができたと思います。そして4月初めには運よく数社から内定を頂くことができました。その中で、社員の方が一番魅力的に見える会社に最終的に決めました。かっこいい社会人になりたいと考え、理想の社会人像が想像できる会社を選んだわけです。そして、その商社は私が就職活動を始めて、最初に応援のe-mailを下さった静岡大学OBの方がおられる会社です。就職活動はまさに人と人との縁だと思いました。私も静岡大学の後輩たちにとって魅力的で誇れる社会人になりたいと思います。大学の評判は卒業生の活躍で決まるとよく言われますので、私も静岡大学の名を背負った一人として社会の中で活躍できるように努力していきたいと思います。

大学に入学して

人文学部社会学科 1年　大石 奈穂

大学に入学してから、自分が興味あることや自分にとって今までにない楽しいことが連続している。数多くあるその中で何よりも一番大きいことは、信頼できる仲間が増えたことだと思う。そのおかげで、今までに見えなかった自分を発見することができている。それと同時に相手のことも多く知ることができる。あまりに大きなものを得すぎているためか、私はどうして此処にいるのか、その意味を明確に理論立てて語ることはできない。ただ漠然とではあるが、感得的に意味を理解しているような気がする。そのくらい、私にとって大学とは今までの全てを覆すほどの場所のようだ。

1年前を振り返ってみる。2005年4月、とりあえず高校3年生に進学した。5月、明確な目標もなくただなんとなく言われたことを行う。9月、同じように続く。受験が我が身にとって意味が無く重荷とさえ感じられた。2006年1月、センター試験。ようやく本気になってきた。3月、合格が判明。無事に高校を卒業。同時に今までの私とも卒業した。受験期の私がこの静岡大学に決めた、その明確な理由は何もなかった。ただ、家から近かった、それなりに名の知れている国立大学だから、それだけの理由だった。社会学科に入って何を学びたいのか明確ではなかった。思えば、そのときの私にとって大学入学とは、受験と言う嫌悪極まりない道を通過して楽になれるから、それだけに過ぎなかったのだ。しかし、成り行きで入学した以上の意味を、卒業までには何らかの形で知ることができるような気がする。

4月、ガイダンス、入学式。新しいことが沢山あり、早々と月日は過ぎていく。5月、部活に入る。春フェスを見る。今、ちょうど1年前が信じられないほどに充実していることに気付く。現在もなお、私にとって大学とは何なのか、未だ理解はできない。単に楽しい場所なのか、有意義な場所なのか、それとも今までの自己の在り方を全て覆し新たに構成する場所なのか。新たな仲間を得た今、その一人一人から答えの断片を知ることができるかもしれないし、己の行動で知ることができるかもしれない。同時に、自分が何をしたいのか、それもまだわからない。幸いなことに、社会学科は幅広く基礎を学び、2年次から専攻コースが分かれていく。人間学、社会学、心理学、文化人類学、歴史文化論。これから時を重ねるにつれ、自分が納得できる答えを知りたい。

そのために今の私ができることは、毎日を全力で生き、日常の全てを無駄にせず、しっかりと地に足を着け、歩むことだと思う。そう、確信したい。

私の大学生活について

言語文化学科3年　鈴木悠記子

二年の終わりごろ、気がつけば、私が入学してからもう二年が立ってしまう、とふと思いました。四年間は長いようですがとてつもなく短いものです。私のサークルの先輩や友達は「自分」というものを明確に持っていて、常に将来の夢や目的に向かって進んでいるため、彼らの大学生活はとても生き生きしているように感じます。そんな姿を見ていると、私は二年間なんとなく目的もなく過ごしてきたような気がし、このままではいけないと思いました。

そこで、思い切って春休みに、一ヶ月間ニュージーランドに短期留学をすることに決めたのです。一人で海外に一ヶ月も行くことは初めてのことなのでものすごく不安でしたが、とにかく新しいことに挑戦してみたいと思い、後先省みずに申し込みました。じっくり考えて行動することも大切だと思うけれど、時には、失敗したときのリスクを気にせず、私のように飛び込むつもりで何かに挑戦してみることも必要だと思います。結果的に、ニュージーランド留学は私にとってプラスになるものでした。まず、今までほとんど知らなかったニュージーランドの歴史・文化・考え方を肌で感じ取ることができ、自分の世界観が今までよりも広がったように思います。また、私の専門コースは英語音声学なのですが、ゼミで研究したいテーマが見つからず先行きが不安でした。しかし、ニュージーランドで面白いことを発見したのです。ニュージーランドは英語圏なのですが、なまりが強くアメリカ英語やイギリス英語と違う点がかなりあります。そこに私は注目し、ニュージーランド英語の歴史や特徴を研究してみよう、と思いついたのです。まさか、こんなところで研究テーマにめぐり合えるとは思いませんでした。そして、ホストファミリーと一ヶ月生活をともにして、言葉は違っても人の温かさはどこでも同じである、ということを感じることができました。この留学を通してこのようにたくさんのことを得ることができ、自分にもやればできるという自信がついたように思います。

また、三年の6月に二週間という短い期間ですが、中学校で教育実習をしてきました。実習前は逃げ出したい気分でいっぱいでしたが、やるからにはとことんやってみようと覚悟を決めて、連日睡眠不足と戦いながらも二週間の実習に一生懸命取り組みました。大変なこともたくさんあったけれど、実習終了時にはやってよかったという満足感で胸がいっぱいでした。

大学生活は自分で目的を見つけ、自分で行動・学習しなければなりません。私は、ニュージーランド留学や教育実習を通して、失敗を怖がらずに挑戦してみること、努力することの大切さを改めて学んだと思います。これからも、大変なことはたくさんあると思うけれど、自分の限界に挑戦するつもりで頑張りたいと思います。

大学に入学して

人文学部 経済学科 1年 森田 なつ紀

私は大学に入学して一番嬉しかったことは友達がたくさんできたことです。小学、中学、高校では地元鳥取県米子市の友達しかいなかったけれど、大学では全国から来た人たちと友達になることができて、お互いに今まで知らなかったことを話したりしてとても楽しく過ごしています。大学に入学してから自分の世界が広がったように思います。サークルに入ったので先輩とも仲良くなれ、他学科の人たちとも友達になれ、高校のときよりも個性あふれる友達がたくさんできました。サークルは大学のいろんな人と交流でき、中学、高校の部活とは違った雰囲気でとてもいい感じです。

入学してまず大変だったのは、親元を離れての初めての1人暮らしです。掃除、洗濯、料理など高校生のときには全く手伝っていなかったので、すべて自分でしなければならないことがとても大変で、親に甘えていたのだなあと実感しました。1人暮らしの最初の1週間くらいはホームシックになり寂しさでいっぱいでしたが、今は慣れて楽しさのほうが大きいです。

入学して約2ヵ月が経ち、大学は授業を受ける人数も多くて、キャンパスも広く初めは驚くことがたくさんありましたが、一番に感じたことは大学生は自由な時間がたくさんあるということです。大学に入って何人かの先生から自己責任という言葉を聞きましたが、本当にそうだと思います。自由な時間がある分、すべて自分で決めていかなければなりません。今までは決められたことをするだけでよかったのですが、これからは自由な時間をどう使うのかも、授業の取り方も、大学4年間の過ごし方も、すべて自分次第で決まるのだと思いました。

大学4年間は自分の時間がもっともある4年間だと思います。楽しい時間はすぐに過ぎますが時間を無駄にせず、大学生のうちにしかできないことをたくさん経験して、有意義な大学生活を送りたいと思っています。授業のほうはまだ始まったばかりでよくわかりませんが、こちらのほうも頑張りたいと思います。将来は英語を生かした職業に就きたいし、またアメリカへ1ヵ月間短期留学した経験がありますので、英語もよく勉強してTOEICは700点以上とりたいと思います。

大学生活を振り返ってみて、ふと思うこと

法学科4年 大谷 太郎

「光陰矢の如し」。昔の人はよく言ったものだ。大学生活が終わりに近づき、いざ振り返るとなると、この言葉の重みと想いが実感できる。今の心境は、悟りを開いた仏陀、無心の境地の宮本武蔵、引き金を引く前のカート・コバーン、アル中の中島らも・・・という感じであれば良いのだが、やはり私は凡庸な小市民。相反する感情が仲良くシーソー遊びをして、私を複雑な気持ちにさせる。「引き返したい」と「先に進みたい」、「よくできました」と「いやいやこれから」、「不安」と「期待」、「後悔」と「充足」、「出口」と「入口」・・・。「相反するものの合一にこそ最大の力が宿る」と茂木健一郎と内田樹が言っていたが、当分強くはなれないみたいだ。まぁ、もうしばらくはウジウジと大学生活の思い出にしがみつきながら、複雑な気持ちで弱者ライフを楽しもう。

さて、こんな感じで今の自分の気持ちを長々書き綴ると、真面目に岳を読み耽る聡明な読者から「自己満足かよ」とボソッと独り言が漏れてきたり、M先生にも「大谷君、これはちょっと・・・」と言われそうなので、そろそろ自らの経験を元に真面目なことを書こうと思う。

大学生活を振り返って、何を得たか。これに答えるのは非常に難しい。大量の本、うず高く積まれたCD、空になったビール缶、吸殻で一杯になった灰皿、耳に開いたピアスの穴、アルコールによる記憶喪失、個性豊かな人達との出会い、そして別れ、法律の知識少々。挙げればきりがない。ただ私はこう思う。大学生活では、色々な物を得、色々な経験をしてきたが、それは全て「自己-自分とは何か-」を得ることに繋がっていたのではないかと。何が好きで、何が嫌いで、何に腹が立って、何に感動するかとかそういう自分の内面に関わる事柄を明確に出来たのではないかと。高

校時代に見た、「自分というものがある　あるがままで十分だ」というホイットマンの言葉や「俺は俺である必要がある　他の誰にもなれはしないのだから」というオアシスの歌詞はその当時、「偉そうなこと言ってやがる。こういう事を言う奴は余程、自分に自信があるに違いない」と思っていた。しかし、今は違う。何となく、分かる。というか、何が言いたいかが理解できる。断じて、「今の自分はホイットマンやらギャラガー兄弟と同じレベルだ！」と言いたい訳ではない。まだ、「自分とは何か」という問いに対しての明確で理路整然とした完全無欠の答えは出ていない。自分については分からない事の方が多い。ただ、自分の事が完全に分かってしまったら、残りの人生はつまらないと思う。だから、残り10年あるか100年あるか分からない人生を適度に苦しみ、適度に楽しみつつ、答えを探して行こうと思う。

今の自分の前には無数のレールが延びている。人生で初めて、これだけの選択肢の前に立たされていささか困惑している。どれに進めば正解かも分からない。しかし、自分で選択しなければならない。まるで、「不思議の国のアリス」で森に迷い込んだアリスの心境。普通に就職するも良し、内定を蹴って世界を旅するも良し、大学に入り直すも良し、資格を取るも良し、ロックスターを目指すも良し、小説家を目指すも良し・・・。おそらく、同じ心境の４年生もいるだろうし、３年生も徐々にこのレールが見えてくるだろうと思う。そんな時、私は、首から時計を提げた道案内のウサギ的なこの言葉 -「あなたがどの道を行くかは、あなたがどこに行きたいかによります」- を考える。その結果、私はまず社会を知りたいと思い、社会に出ることを選んだ。実際、今の時点ではどうなるか分からない。死ぬほど良いこともあれば、死ぬほど悪いこともあるだろう。けど、自分で選んだ道。楽しみつつ、ガムシャラにやってやろう。最後に、就職活動中に出会った、ベンチャー企業の社長の一言で終わりにしようと思う。

「まず、向き不向きなんて考えずに徹底的にやりなさい。徹底的にやってみて、どうしても向いてないと感じたとしてもそれで良いんです。なぜなら、向いてないと分かっただけ、あなたは以前よりも進歩したんだから。」

ワールドカップを大学生活中に観戦出来る喜びを噛み締めつつ・・・。

新任教官紹介

言語文化学科教授 スティーブ・レッドフォード

My name is Steve Redford, and as of April, 2006, I am an American literature teacher in the Faculty of Humanities and Social Sciences. I suppose I was born about as far away from Shizuoka City as one possibly can be, in Atlanta, Georgia, host to the 1996 Olympics. As a child, I was crazy about sports, especially football, and most of my time in high school was spent playing football or thinking about playing football. I did just enough in my classes to get by. I don't think I read a complete book the whole time I was in high school.

Once I went to university, however, I fell in love with literature and storytelling, and I read and read and read. Then, in 1988, I was reading the Sunday newspaper when I saw a job advertisement for English-teaching positions in Japan. I applied, and surprisingly, was chosen. The next thing I knew I was living in Miyazaki, and more or less I've been living in Japan ever since. I've worked at universities in Osaka and Kumamoto, and for the last eight years I worked as a teacher in the Faculty of Education at Shizuoka University.

Literature has been one of the important loves of my life, so I'm very happy to have a position teaching American literature at Shizuoka University. I look forward to discussing American literature and culture with the students here.

社会学科 助教授 江口昌克（えぐちまさかつ）

2006年４月に人文学部社会学科に着任いたしました江口昌克と申します。専門は臨床社会心理学です。

地域のメンタルヘルスや福祉の向上に，臨床心理学の立場から何ができるだろうか，いつもそんな課題を持ちながら人と社会に向かいあってきました。

障害の有無や年齢によらず，個人がそれぞれ自分の好み、関心に応じて参加できる地域の姿をつくることができたらと切に願っています。

私には自治体の心理職として保健福祉を基盤としたまち作りにも関わっていた経験があり，それがそのままライフワークとなっています。

前任校では東京都内と千葉を主なフィールドとしていましたが，この度，静岡に参り新しくフィールド開拓を始めました。

直接，地域社会に還元・貢献できる研究活動を目指しています。

初めての土地で，不慣れなところばかりですが，静岡の皆様に受け入れてもらえるよう努力していく所存です。

どうぞよろしくお願いいたします。

人文社会科学研究科助手 小堀彩子（こほりあやこ）

教員として母校に戻ってくることができたことを心から嬉しく思っています。人文学部棟のテラスから眺める駿河湾は、学生の頃同様ゆったりと美しく、何だかホッといたしました。数々の会議や研究会・研修会などに参加し、学生の頃は何気なく受けていた授業や催し物の裏舞台を知るところとなり、教職員の陰の尽力を痛感しています。

研究では、ヒューマン・サービス従事者のメンタルヘルス維持・向上を目指し、生物・心理・社会的モデルに基づいた取り組みを行っています。生物的側面では睡眠というアプローチから予防的な取り組みを、心理・社会的側面では彼らの情緒的負担感に焦点をあてバーンアウト促進・抑制要因について明らかにしようとしています。

静大では，研究のほか、こころの相談室にて学生の指導および地域の方々を対象とした相談活動に携わっています。

様々な方から受けたこれまでの教育に感謝しながら、教育・研究・臨床活動に誠実に取り組みたいと思います。

井上隆道先輩ありがとうございました

文理７数　深見謙次

昨（'05）年７月６日付ワープロでいただきましたお手紙で、気丈にも闘病記が掲載された「大地（No29）」と、御見舞はお互いだからと「戻し」を同封され、生気ある近況を述べておられました。

また、余病の手の不自由な中にも、何年振りかでいただいた今（'06）年の年賀状に、静岡へ行く元気を取り戻そうとされる意志を示された肉筆を鮮明に記憶しています。

それらをひたすら信じて、ご回復を祈り期待していました。

いま、それが文筆家の絶筆となる現実に遭遇し「静岡市で隔年開催の悟寮会にはもう来てもらえなくなった ..... あの稀有な深い懐に飛び込むことができない ..... 同窓会に対する一途な情熱を浴びる機会を失せた」空しく空虚に浸るのは私ばかりではありません。

しかしながら、旧制静高同窓会との関係諸般の多事に加えて、寮誌や同窓会報誌などの編集・刊行、寮祭や寮歌祭の企画・演出、記念行事の企画・推進などにおける幾多の足跡が、懐かしく脈脈と蘇ってきます。

その中でも最たるは、静岡大学文理学部の跡地にある、静岡市城北公園の日本庭園に平成４年９月建立された巨石の仰秀寮碑であり、人脈と感性を活かした募金・石碑（手配・制作・設置）・除幕の一連のプロモーターとしての熱血は、同窓生多数の賛同と協力を得た象徴として、風雪に堪えて輝き君臨しています。井上先輩の魂がこもったこの記念すべき碑は、先輩の思い出であるばかりか、旧制静岡高校と静岡大学同窓生万人の青春のモニュメントであります。

この碑の設置工事に先立つ手続のご下命を受けた私は、静岡市公園緑地課へ申請のため日参陳情して、許可を受けた係わりは誇りであり、この一例のように同窓会活動を通して数多の薫陶を受けましたことは身に余る光栄で、感謝の一念万年であります。

井上先輩。同窓会でのたくさんの思い出と大変なお骨折りをいただき、本当にありがとうございました。

ご冥福を心からお祈りいたします。

合掌

2006年５月19日（悟寮会事務局長）

惜 別

松田和典さん（人文５回・法）

本年４月23日、癌のため死去された。松田さんは会社の社長として『岳』の発行や、同窓会名簿の維持・管理にあたっていただいた。私はその担当役員ということから知りあい、昨年の２月、酒井晴生、三島文夫両君とともに四人で蒲原町の御殿山に遊び、ふもとの店で昼食に蕎麦を食べた。松田さんはそれがよほど気にいったのか、そのすぐあとに奥さんと二人で、その店を訪れたということだった。

そのわずか一ヶ月後に、同氏が日赤でガンの手術をされたと聞き、ほんとうにびっくりした。三河（愛知県額田町）育ちで、頑健そのものと思っていたからである。その後順調に恢復していると聞いて安心していたら、今年になって再入院したという知らせである。何か悪い予感がして、なかなか見舞に行けず４月４日になってやっと病院に行った。案に相違して、松田さんは病気にへこたれた様子もみせず、まことに立派であった。

しかし、やはり残念な結果となった。葬儀では、私が同窓会を代表するかたちで、島崎藤村原作のつぎの詩、遠きわかれにたえかねて／この高楼にのぼるかな ... を引用して弔辞をよんだ。

出会いがあれば別れがあるのは人の世の常ではあるが、途なかばにして倒れた松田さんのことを思うと哀切の念にたえない。長い間、同窓会活動に尽力されたことに感謝し、ご冥福を心よりお祈り申しあげます。

山口　茂（人文１回・同窓会副会長）

悲しいお知らせです。

木村みよ

12回生の杉山和子さんが２月５日に亡くなりました。杉山さんはペースメーカーを入れての生活を十年以上続けていましたが、ここ2,3年は体調があまり良くなかったようでした。５日、友人の方との食事に出かける途中で倒れたのです。

金沢苑子さんや私が何回電話をしても連絡が取れないので心配になり、実家に電話したのが11日、お葬式の前日でした。連絡を取り合って同級生の女性５人がお葬式に間に合いました。突然のことで「多分自分が一番驚いているだろう」と医者の弟さんがおっしゃっていました。でも、弟さんには分かっていたことのようでした。お葬式でご家族とお話をすることができましたが、ご家族に大切に思われ、愛されていたことがよく分かりました。

私は予備校のときに彼女に出会いました。それから長い年月、友だちとして付き合ってもらいました。金沢さんや他の同級生も一緒に旅行したり、食事をしたり。とりとめもなく色々なことを電話でも話しました。夜遅く、長電話をしました。張りのある美しい声を思い出します。

金沢さんとはメールや電話でしょっちゅう和子さんのことを話題にしています。卒業して双葉の先生をしていたのですが、教え子で深く彼女を慕う方は、スイスからお墓参りにいらっしゃいました。

カコさんがいなくなってしまったということが信じられなくて、電話したい、会いたいとよく思うのです。彼女には友人のオーストラリア人の作家のために過去３回、万葉集などの書を書いていただいたのですが、４回目の書についての打ち合わせを亡くなる前日にしました。その作家、リアン・ハーンはその死を悲しみ、ホームページに彼女の書と彼女を悼む文を載せています。ぜひ、お読み下さい。www.gillianrubinstein.com 残念ながら日本語版には彼女の書が載っていませんが、世界30ヶ国で出版された本の殆どには彼女の書が使われています。「生きた証になるね」とある画家が彼女に言ってくださったそうです。

静岡の吉津にあるお寺で、カコさんはご両親と共に眠っています。何でも出来て、優秀で、編集者として陰の仕事を誠実に勤め、決して人を攻撃したりしなかったカコさん。

色んな人に「暖かくなったら会いましょう」という約束を残して、逝ってしまいましたが、早すぎました。淋しいですよ、カコさん。

書籍紹介

『欧米のエアワーカー―福祉国家の忘れられた人々―』
三富紀敬 著(ミネルヴァ書房、05年11月刊)1-364頁

欧米の社会保障や社会福祉に関する調査研究は多い。それが、日本における制度の設立や改定に与えた影響も、ごく最近の例に限っても介護施設の個室化など、少なくない。しかし、医療や介護、あるいは保育など対人サービスを担う人々に関する調査研究は至って乏しく、一部には事実の誤認さえも含む。本書は、ケアワーカーの労働市場について、介護及び保育の質と労働諸条件との関わりを重視しながら検討することを目的にする。分析の対象は、福祉国家類型論に従いながら英米加の三ヶ国であり、これらの国々の特徴を明らかにするために北欧三ヶ国及びフランスにも必要に応じて触れている。

『輝いていた日々』
山口 茂 著(武田出版、06年5月刊)　四六判、232頁、定価1,300円

本書は 230 頁の最後に書かれている＜己の過ぎ去った青春の輝くような日々への愛惜の念＞が記憶を通して綴ったのであろうか。

大学時代は青春交響曲のようなものであり、ある人は＜未完成＞を抱えながら自己研鑽に努め、また、ある人は＜運命 (第５番)＞のように、アレグロ / アンダンテ / アレグロ / アレグロで、年々歳々成長を続ける材料を身につけるものなのか。

それにしても、純粋ということは＝感動であり、久しぶり懐かしく、爽やかな思いで読み終りました。

最後に＜原ちか子＞さんに会ってみたくなりました。

― O さん (文理 14 回卒) の手紙より ―

フィリップ・ポンス『裏社会の日本史』
安永愛 訳(筑摩書房、06年3月刊)403頁、定価4,515円

本書は、フランスの日刊紙『ル・モンド』の極東特派員を務め、日本滞在も長きにわたる著者による異色の日本論 (原題は『日本の貧困と犯罪』) の翻訳である。

前著『江戸から東京』で日本の庶民文化の豊かな水脈を描きだしていたポンス氏は、本書において、日本の中でマージナルとされてきた人々の営みを、歴史の厚みの中で追っている。周縁的なものこそが、社会の本質を見抜く鍵であるとの視点からである。

中世に端を発する賤民、被差別民、過酷な労働に携わっていた江戸期の人足、近代以降の下層労働者、そして、山谷や釜ケ崎のホームレスまで。また、江戸時代の義賊や侠客、戦中の愛国的やくざ、政財界との結びつきも深めた戦後のやくざ、また、近年のビジネスやくざまで。ポンス氏は、人文科学、社会科学にまたがる膨大な書物を読み解き、また、取材やインタビューの成果をも踏まえ、日本社会のタブーに触れる問題にも果敢に切り込んでいる。悲嘆調や単なる好奇心の満足に終わらない、人間理解の書でもある。

『清沢洌―その多元主義と平和思想の形成』
山本義彦 著(人文学部学術叢書第13号、学術出版会、06年2月刊)

本書は清沢洌『暗黒日記』、『清沢洌評論集』(ともに岩波文庫)、『清沢洌の政治経済思想』(御茶の水書房)、『清沢洌集』全８巻 (日本図書センター) を編纂もしくは著してきた一連の研究の上に立つ研究書である。幸いに岩波文庫をはじめこの研究シリーズについては、大方のご支援を受け、またアメリカのコロンビア大学で昨年末に出版された日本研究の集団研究書でも、紹介されるなど、今日の経済を中心をとしてのグローバリゼーションの問題性、またブッシュ大統領の国際関係運営と日本の対応のあり方を照射する上でも、多くの貴重な問題提起を行えたのではないかとひそかに考えている。

『消費者保護と私法理論 ―商品先物取引とフランチャイズ契約を素材として―』
宮下修一 著(信山社、06年3月27日刊)520頁、定価12,000円＋税

今日の取引社会では、事業者 - 消費者間の消費者契約のように、能力的に対等とはいえない当事者間で契約の締結がなされることが少なくありません。そこで、事業者のように能力のまさる当事者に対して、契約の成否にかかわるような重要な情報をあらかじめ提供する義務 (情報提供義務〔説明義務〕) を課し、それに違反した場合には責任追及を可能にするべきであるという考え方が提唱されています。しかし、その根拠や内容、義務違反の効果などをめぐっては、文字通り議論が錯綜しております。

本書は、このような状況を打破すべく、日本とドイツの学説状況をふまえたうえで、契約上の「債務」の概念を広く捉えることによって、情報提供義務を当事者の意思に基づく義務として「債務」の中にとりこむという新たな理論の提唱を目的としております。さらに、商品先物取引とフランチャイズ契約という社会問題化している２つの取引を素材にして、上述した私法理論を現実の紛争の場に導入することで、新たな解決方法を提示しようとするものです。その意味では、本書は、情報提供義務を法体系の中に理論的に位置づけるとともに、それを用いた実際の解決を探るという「理論と実務の架橋」の試みでもあります。なお、本書の詳細については、信山社ホームページ (アドレスは、http://www.shinzansha.co.jp/0604shouhishahogo.html) をご参照下さい。

本書は、人文学部に配分された学長裁量経費から出版助成をいただき、「静岡大学人文学部研究叢書 2」として刊行されたものです。山本義彦・前人文学部長、松田純・現人文学部長をはじめ、ご助力をいただいた人文学部の教職員スタッフ各位に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(人文学部法学科助教授　宮下修一)

『初期徳川氏の農村支配』
本多隆成 著(吉川弘文館、06年2月刊)328頁 8,300円+税

日本の中世社会から近世社会への移行が、戦国動乱期から織豊政権期を経て、最終的には幕藩体制として完成したことからすれば、織豊政権と同時期の初期徳川氏の諸政策を検討することが、重要な研究課題の一つとなる。本書はこの課題を、当時の権力の基盤となる農村支配にかかわる問題、主として検地や貢租、奉行人や代官などの問題を通じて追究しようとしたものである。

本書が対象とした初期徳川氏とは、永禄３年 (1560) の桶狭間合戦による徳川家康の自立の過程から、慶長５年 (1600) の関ヶ原合戦で天下の実権を握るに至った時期までの徳川氏についてである。その中でも、とくに天正 10 年 (1582) から同 18 年までの三河・遠江・駿河・甲斐・南信濃の五カ国領有段階を重視した。

初期徳川氏に関する研究は、これまで決して充実しているとはいいがたかった。さいわい近年五十分一役や五カ国総検地に関する諸研究が相次ぎ、明らかに新たな段階に至ったといっていいような研究状況となってきた。

本書は、1989 年に刊行した『近世初期社会の基礎構造』以降の私自身の研究を基に、これら近年の諸研究をできるだけ批判的に検討し、あらためて全編にわたり書き下ろしたものである。そのため、主題に関する最新の成果をも検討対象にすることができ、現段階での到達点を示したものと自負している。

『日本茶文化大全 ALL ABOUT TEA 日本茶篇』
ウィリアム･H･ユーカース著 小二田誠二監修 鈴木実佳監訳
静岡大学 ALL ABOUT TEA 研究会編訳
06年3月31日刊、B5判変形 並製166頁 本体2,800円

2004 年度から静岡大学オールアバウトティー研究会として活動している静岡大学教員・学生そして社会人のグループの翻訳・研究活動成果の第一弾です。日本茶篇としてここに収められているのは、全 54 章のうちの３章で、日本の茶道、日本の茶栽培と生産、日本茶の貿易がテーマとなっています。ユーカースは日本の茶についてのリサーチを静岡を訪ねて行ったので 100 年近く前の静岡の様子が描かれており、静岡と縁のある方、茶産業に関わる方、茶文化に興味のある方に面白く読んでいただけると思います。残る 51 章も順次刊行して行く予定です。

(鈴木実佳)

平成 18 年 3 月 人文学部卒業生就職・進学等学科別一覧

		社会学科			言語文化学科			法学科 (昼間)			経済学科 (昼間)			法学科 (夜間)			経済学科 (夜間)			計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
卒業生		37	42	79	23	63	86	80	48	128	119	56	175	22	22	44	22	9	31	303	240	543
就職者		21	26	47	21	55	76	50	31	81	95	43	138	7	5	12	8	6	14	202	166	368
内訳	公務員	2	5	7	1	3	4	17	7	24	12	6	18	0	0	0	2	0	2	34	21	55
	教職公務員	0	0	0	2	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	4
	私学教員	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	一般企業等	19	21	40	18	49	67	33	24	57	83	37	120	7	5	12	6	6	12	166	142	308
進学	大学院進学	7	8	15	0	4	4	11	3	14	7	5	12	0	0	0	1	0	1	26	20	46
	専門学校	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1	2	1	3
	留学	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	2
	その他	0	1	1	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3
	未決定	0	1	1	2	0	2	2	2	4	1	0	1	1	0	1	1	0	1	7	3	10
既就職者		0	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	12	11	23	8	2	10	21	14	35
就職しない		4	3	7	0	2	2	9	10	19	12	7	19	1	3	4	0	1	1	26	26	52
就職未決定		5	2	7	0	2	2	4	1	5	2	1	3	1	3	4	3	0	3	15	9	24

※進学その他 (編入学生、研究生、科目等履修生、聴講生等)　※就職しない (国家試験・公務員試験・教員採用試験等受験予定者、主婦、結婚予定者等)

個人情報保護

会員の大切な個人情報は、当同窓会の活動以外には一切使用致しません。第三者に開示・漏洩することは一切ありませんのでご安心下さい。

尚、会員データベースからご自分の個人情報データの削除をご希望される方は、下記の『変更データ個人票』またはホームページ『www.gaku.org』から事務局までお申し出で下さい。

会員の皆様へお願い

次の場合には必ず、「変更データ個人票」を同窓会事務局までお送りください。
- 転勤、引っ越し等により、住所が変更になったとき。
- 自宅の電話番号が変わったとき。
- 結婚等により、姓が変わったとき。
- 勤務する会社等が変わったとき。
- その他会員名簿の記載事項に変更が生じたとき。

静岡大学文理･人文学部同窓会事務局
〒422-8529　静岡市駿河区大谷836　静岡大学共通教育A棟
TEL･FAX　054-238-5148

住所等の変更は、速やかにこの用紙に記入の上事務局へお送りください。

＊は必ず記入のこと。
訂正検索の利便のため、卒業回、卒業年、専攻学科を必ず記入してください。

静岡大学文理･人文学部同窓会 変更データ個人票	全部で　　件 No.	＊データ作成者名 電話　(　　)　―	
変更データ入手日　年　月　日	本部受取日　年　月　日	データ更新日　年　月　日	
個人コード番号		連絡事項	
＊文理･人文学部　回　昭和･平成　年卒業　専攻			
＊氏名（ふりがな）	新氏名（ふりがな）		
＊名簿の　氏名　住所　電話　勤め先　支部　の変更（該当するところへ◯を付ける）			
新住所 新電話	〒 (　　)　―	新勤め先 会社名 電話	(　　)　―